



[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# でぽら

11

'96秋冬号



特集 生き物がいて、人がいて……  
野生動物との共生をめざして

## 特集 生き物がいて、人がいて…… 野生動物との共生をめざして

森や河川等の開発や自然環境の悪化、樹木の変化等により、野生動物は棲み家を失い、エサとなる食糧不足等にあえいでいる。絶滅危惧種、危急種は現在約140種。専門家等による緊急報告に加えて、動物との共生をめざす人々や地域の取り組みを取材した。



●ヤンマの「黄昏摂食群飛」を見た——3  
トンボ王国（トンボ自然公園）中村市



●[ホタルの里]づくり——6  
数万匹が乱舞、元祖ホタルの名所（辰野町・松尾峡）  
子供達が主役の豊浦ゲンジボタルの里（豊田町）



●そのまま、ミヤコタナゴ（栃木県）——9

●ハヤブサが帰ってきた——10  
やさしく見守る地域の人達（下田村）

●ツキノワグマの住める森を——12  
「奥山放獣」と自然の再生と（芸北町）  
〔動物とふれあう観光地〕——14、15  
マタギの里の熊牧場／波勝崎野猿公苑

■川や湖を魚の宝庫に——16

- ・忠類川をサケ・マスが上る恵みの川へ（標津町）
- ・然別湖のオシヨロコマを守ろう（鹿追町）

■タンチョウと共に40年。給餌活動をする人々を訪ねて（鶴居村、標茶町）——18



### 都市からの報告

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として『でぼら』をお届けいたします。回覧し、多数の方に高覧いただければ幸いです。

#### ●表紙

- ・湿原のタンチョウ親子（撮影／青木則幸）
- ・ツシヤママネコ（撮影／長崎県自然保護課）



●「もう時間がない」瀕死の丹沢から鹿を守れ!——21

●世紀末の東京、ニホンザルの森に何が起きているのか——24

■天然ブナ林の住人クマゲラは生き残れるか(小笠原昌)——31

■楽園を守れ! ツシヤママネコの保護対策(渡辺綱男)——32

■イリオモテヤママネコの保護増殖事業(坂口法明)——33

■イヌワシとの共存を目指して(山田律雄)——34

■河畔林の回復や自然繁殖で、シマフクロウ——36

■絶滅危機にあるトンボたち(杉村光俊)——37

■鳥島でアホウドリの新居作り(鶴見みや古)——38

■我が国の絶滅のおそれのある野生動物種——39



〔INFORMATION〕野性動物や自然とふれあう施設・施策——28



トンボ自然公園のヤンマ (撮影/杉村光俊氏)

# ヤンマの「黄昏摂食群飛」を見た

## トンボ王国(トンボ自然公園) (高知県中村市)

### 水棲動植物とトンボの楽園

訪れたのは台風5号が去り、真夏日を思わせる快晴の日。四万十川にほど近い田黒池田谷のトンボ自然公園には、職員や会員たちが10数年にわたって整地し手入れしてきた池や沼、小川が道路の両側に見渡す限り広がり、池ではハス、スイレン、ヒメコウホネ、ミズオオバコなどが色々な花を一斉に咲かせている。

そんな楽園の中を沢山のトンボが飛び交っている。おなじみのシオカラト

ンボをはじめ、全身鮮やかな赤色をしたシヨウジヨウトンボ、紫藍色の幅広い羽を蝶のようにひらひらさせて戯れるチヨウトンボ、黄色、若草色、コバルトブルーのイトトンボ類……。数えあげたらキリがなく、大半が昔懐しいトンボ達だ。

ハス、スイレンなどの水棲植物の豊富さにも驚いたが、水面では近頃お目にかかることが少なくなったアメンボやメダカなどがすいすい泳ぎ、水中にはクサガメ、ドジョウ、タニシなども生息。その昆虫の種類だけでもかなりになる。池の奥には水田が広がり、生息にひと役買っている。猛暑だが、吹きぬけてくる風が心地よい。

「四万十とんぼ自然館」の杉村光俊さんから「今日あたり、夕方にはヤンマたちが沢山飛びますよ」といわれ、一度市内に戻ったあと、日暮れを待って再びトンボ自然公園へ出かけてみた。

「7時10分頃、池の上空に現れます」という杉村さんの言葉通り、夕焼けが終わり夕闇が訪れるその数十分の間に、どこからか沢山のヤンマの雄雌達が見られた。空中にいる虫たちを食べるべき産卵にそなえるのだろう。時々猛スピードで目の前を横切っていくものもいる。

ヤンマ達は、森や里へ急ぐツバメと紛うほどに敏捷に大空高く飛び交い、やがて池近くへ降りてきて旋回したあと、森へ戻っていく。



▲雑木林と田んぼに囲まれたトンボ自然公園

昔、野山や川原、都会の空地を駆けまわって遊んだ少年たちにとって、トンボはかけがえのない仲間であり、憧れと感動の象徴であった。とくにギンヤンマが自由自在に大空や池を旋回飛翔する姿に胸をときめかしたものである。

最近各地に「トンボの会」や「トン

ボ公園」などが出来ているのは、トンボの棲める自然を保全、整備すると共に、いまの子供達にトンボの素晴らしさを知ってほしいという親たちの願いも込められている。

世界初のトンボの楽園、高知県中村市具同のトンボ王国(トンボ自然公園)へ出かけてみた。



▲ネアカヨシヤンマの摂食群飛



▲夕暮れ時、ヤンマを追う杉村光俊さん

「ヤンマのこの行動を黄昏摂食群飛といい、梅雨明けの知らせでもありません」杉村さんは最長7mにもなるという大きな網を上手に操って、マルタンヤンマの雌を一頭捕ってくれた。

明るい金色の絞の眼と肌（雄はブル）に茶色い羽。ヤンマの中で一番美しいトンボだそうで、感動しながら眺めたあと大空へ放した。ヨシ原を棲家にするというネアカヨシヤンマの雄と雌にも初めて対面した。まさにトンボ王国、トンボ少年が憧れのメッカである。

「明日はもっと沢山群れてきますよ。本当はここを訪れる観光客や地元の子

供達に、ヤンマのこの様子を見てほしいんですがね……」

「とんぼ自然館」は入館料（大人一人400円）がいるが、公園の方は無料。誰でも好きな時に自由に入園できる。しかし意外と地元の人達の利用は少ない。あふれる自然に慣れすぎてしまっているのだろうか。

### 昆虫に関心の薄い現代っ子たち

（社）トンボと自然を考える会が運営する「四万十とんぼ自然館」は1990年、「トンボ自然公園」は1988年にオープンした。WWF（財・世界自

然保護基金日本委員会）の協力を得て休耕田525㎡を買収、以降毎年のように一枚、二枚と休耕田を買収または借り上げて、トンボ生息地に整備しておしてきた。

池の深さ、水棲植物やあぜ道の野草の違いによりトンボの生態も変わってくるので、よくここまで多様な池や沼を作り上げたと感じする。ここには、すでに失われてしまった湿原や原っぱが自然そのままの姿で残っているが、水（沢水）の手配、池や植物の手入れ、周辺の森や道路脇の草刈りなど、常に裏方の作業が大切とのこと。

杉村さんは「自然環境の保全といって草を伸び放題にするところが多いのですが、そうなるとトンボによっては消滅してしまいます。それなりに手入れされた美しい環境と風通しのよさが大切です」

トンボ自然公園の会が管理する面積は約4ヘクタール。水田と周囲の山林を入れると約50ヘクタールになり、この中に約70種類のトンボが生息している。

公園入口に建つおしゃれな建物が「四万十とんぼ自然館」。世界中のトンボ標本約1000種3000点をはじめ、トンボの生態ビデオや写真、世界各地の昆虫標本、四万十川を中心とした淡水魚飼育コーナーなどがあり、昆虫マニアにはたまらない魅力の館だ。建物は中村市が建築してくれたが運

営は（社）トンボと自然を考える会。会員の会費（個人で年2000円）と入館料でまかなっているが運営はさびしいようだ。

「会員は現在1500人弱で伸び悩んでいます。各地の会もそのようですが、発足当時は会員や協力者も多いのですが、それを継続させていくことは結構大変なことです」

会では年6回機関紙『とんぼと文化』を発行したり、親子を対象にトンボ教室、アマチュアカメラマンのフォトコンテストなど、さまざまな行事を行っている。

杉村さんは小学校2年の時からトンボのコレクションをはじめた。学校から帰ると虫かごにオオシオカラトンボ

▲四万十とんぼ自然館



がいて、オニヤンマに追われて家の中へ逃げたことを母親から聞き、そのヤンマとはどんなトンボかと興味を持ったのがはじまりだという。

高校の時、ベッコウトンボなど貴重なトンボの生息地が開発で失われた。以来トンボの棲む楽園を作りたいと活動をはじめ、貴重な種類は捕獲してきてヤゴを育成するなど、飼育・繁殖の方にも力を入れてきた。

「いまの子供はトンボや昆虫への関心が薄いですね。原体験がないせいかな標本をじっくり見るとか、トンボを夢の中

で追いかけるという少年が少ない。見るだけでは好きになれないからと大切にコレクションするなら少しは捕ってもいいよと体験教室を開催するんですが、夢中になるのは父親ばかり。モノが豊かになり何でも手に入る分、感性がにぶくなり、冒険心や探究心がなくなっている。夏休みに池で採ったザリガニやミドリガメを無料でプレゼントしています。市価なら500円はしますので、そうなると欲しくなって、池に入って取っていく子が現われるんです。県の先生達が環境教育研究会をつ

くり、自然界には弱いもの強いもの、さまざまな生物がいて、それが共生しながら豊かな環境をつくっているところを教えようといういろいろなフィールドワークを試みっていますが、今の子供達は何をやっても夢中にならないとこぼしています。私にとっても次代を担うトンボ少年をどう育成していくかが重い課題です」

と杉村さんは語っていた。

● 四万十とんぼ自然館／高知県中村市 共同 ☎ 0880(37)4110  
(取材／浅井登美子)



▶ザリガニ、ミドリガメ捕りに興じる子供たち

マルタンヤンマの雌



高知では一番小さいコフキヒメイトトンボ (体長18〜22㎜)



高知では「アカチ」と親しまれているシヨウジヨウトンボの雄



縄張りを守るチヨウトンボの雄 (撮影／杉村光俊氏)





# 「ホタルの里」づくり

初夏の風物詩、ホタル。童話にも歌われ、全国どこかの川辺にも生息していたホタルだが、河川の汚れ、水田等の農薬散布、自然環境の悪化等で、何時の間にか姿を消していった。いま各地で再びホタルの舞う姿を見たいと「ホタルの里」づくりが進められているが、長期にわたる保護増殖活動と観光客のマナーが求められている。

上/雨上がりの夜草むらで光るホタル(辰野町松尾峡)  
右/ホタルのために作られた水路や池、草地。



るに従い、その数が次第に減ってきた。辰野町ではホタルを守るために町をあげて取り組んだ。商工林務課栗林秀樹観光係長にお話を伺った。

辰野町は南北に走る中央アルプスと南アルプスに囲まれ、伊那谷の玄関口としての歴史を持つ町。諏訪湖に源を発する天竜川が南流し、その両岸に水田が広がり、水田を包むように西側には深い森がある。辰野のホタルは明治の頃から広く紹介され、大正15年には県の天然記念物に指定され、昭和35年に再指定されている。

## 数万匹が乱舞する 元祖ホタルの名所 辰野町・松尾峡(長野県)

「諏訪湖を源にする天竜川の汚染が目立つようになったため、沢のきれいな水を加える工事を行い、水路の改修にあたっては、木杭を使ったり川幅を広くしたり、周辺の樹木を保全するなどホタルの棲みやすい環境づくりに力を入れました。当時圃場整備工事というコンクリートにするのが一般的でしたが、カワニナの棲む河川を作るために先輩たちが知恵を出し合いいち早くそれを実行してきました。また、休耕田を町が買い上げ、ホタルのための水路や池を作り草刈りや泥上げなどの手入れを続けてきました。」

そのかいあって、いま松尾峡には昔のようにホタルが復活、その数はひと夏に4万とも5万とも言われている。

松尾峡は、市街地から徒歩約15分ほどの場所にあるが、町の突き当り部分に当たるため、人や車の通行も少なく自然環境が保全しやすい。

小川がさらさら流れ野草や樹々が茂る小道、昔ながらの手入れされた小さな田んぼ、その中央部分にホタルが産卵し幼虫が育つ小川や池、草むらがある。小川の木杭などにはカワニナが

つしり生息しており、わざわざ育成しなくてもホタルが食用する分量は充分間に合っているという。

「田んぼは30戸ほどの農家が耕作していますが、特に農薬散布を規制する等の対策はしていません。昔と違って農薬の使用量は減っていますから」と栗林さん。ホタルを愛する人々の努力で自然の生態系をごく自然に回復、維持しているのだろう。

ホタルシーズンの土曜日には「ほたる祭り」が開催され、町の中央部・おまつり広場では郷土芸能の数々が披露され、商店街も夜おそくまで賑わう。ホタルの里を訪れる人は何千人とふくれ上がり、商工関係者が道々でガイド役に当たる。

## 子供達が主役の 豊浦ゲンジボタルの里 豊田町(山口県)

### ●小学校内に飼育施設を設けて

「きれいだね カワニナの棲む川 ほとる飛ぶ」(小5山本佐治君)

豊田町西市小学校(児童数約200名)はゲンジボタルの飼育や情報等に関する拠点になっており、飼育施設が設置されている。

「都市の人が親子で堂々と昆虫箱と網を持って来たのにはびっくりしたこともあります。一般的には観光客のマナーはよく、来年もまた見たいと帰っていきます」

幻想的で美しいホタルの乱舞は、小さな命が必死で生きている姿の象徴でもある。川や地中ですごしたホタルが蛹から羽化して地上を舞う時は生命を燃焼し終える時。その「切なさ」を観光客を含めて地元の人々は知っているのだろう。

松尾峡以外でも、辰野町では各地でホタルの小さなグループが育ちはじめており、昔のように庭先でホタルの姿をみることも多くなってきた。

(写真・文/浅井登美子)



5月下旬から6月下旬になると、成虫となったゲンジボタルを親ボタルとして採取し、水苔を入れた産卵場で産卵・羽化させる。今年は5万匹の羽化を予定した。

ゲンジボタルは成長するまでに6回脱皮して、脱皮ごとに大きくなっていくが、その成長に合わせて餌となるカ

ワニナを与えなくてはならない。そのため、子供達は休日や夏休みを利用して10日毎にカワニナ採取のために川に出かける。西市小学校の近くで木屋川と栗野川が合流しており、ホタルの生息数も最も多い。

子供達は、カワニナを採らせていただいたお礼にと、環境教育も兼ねて河川の清掃をし、いつも川がきれいに保たれるよう心がけている。

水量や水温の変化に加えて、ゴミや家庭からの生活排水、農薬などが川に大きな影響があることを、子供達は実感として学んでいく。



▶豊田町西市市街を流れる木屋川  
▼8月の夏休み中の登校日にカワニナ捕りをする小学生達。このあとの川の掃除や川遊びを楽しむ。

「ホタルは見るもの、育てるもので捕るものではない」という考えは地元の小學生には徹底しており、いまでは小學生たちが「ホタル情報員」場所ごとに最初に見た時期や最盛期を確認・記録して、これを元に「豊田町ホタル生息図」が発行されている。

### ●ホタル復活に40年

豊田町のホタルは、昔から「豊浦ホタル」とその名を知られ、昭和32年には国の天然記念物に指定されている。しかし、たび重なる木屋川の氾濫を防ぐための護岸工事が行われてからは





木屋川の納涼「ホタル船」

ホタルは一気に激減した。  
昭和30年代後半、町の旅館経営者が  
ホタルを観光に生かそうと呼びかけた

のがきっかけで「蛍研究会」が発足。のちに藤井勝利さん（写真館経営）が中心になって「豊田町ゲンジボタル飼育研究委員会」へと発展し、昭和58年から飼育、放流を積極的に行ってきた。「幼虫の数を増やすだけではダメ。水槽に何匹飼育したら最も大きく育つか、ホタルの生息に適した環境は、と試行錯誤をくり返してきました」

護岸工事をした川辺は「ホタルブロック」と呼ばれる特殊な連結ブロックを使用。竹藪の跡には柳を植えて産卵羽化の場所を確保した。

これらのデータ等は、藤井さんの手でしっかり記録され、各地ではじまった「ホタルの里づくり」にも情報を提供、その中心的役割を担っている。

子供達がホタルの育成に大きく関わってきたのも、会や町の人々の「ホタルを通して町を愛する子供達に」という願いによるものだった。

西市小学校には飼育活動の中に「ホタル学習会」というのがあり、みんながその年の反省や翌年の目標などを討論する。

今年の子供達の意見、要望により学年に合ったホタルの見方、考え方を大切にしようと、児童が自由に飼育する試みが採用される。各教室に飼育箱を置き、一クラス2000匹の幼虫を配布する。「子供の自主性にまかせる」をモットーにした、一歩前進の環境教育である。

▼藤井さん(左側)と商工会議所青年部のボランティアの人々。  
▲乗船場、2艇で交互に出発し約30分の遊覧納涼。



### ●木屋川に船を浮かべて

豊田町では5月下旬から6月下旬まで、町の至るところでホタルが観賞できる。川の水温差や環境の違いが幸いして長期間楽しめるのである。土、日曜日には藤井さんらが「蛍観賞バス」を運転して絶好のポイントに観光客を案内してきたが、2年前から役場商工観光課が主催して「ホタル船」が運行されるようになった。

木屋川に屋形船を浮かべて、ホタルの幻想的な乱舞の様子を身近に川面より観賞してもらおうという試みて、遠



く関東、九州からも観光客が訪れるようになった。

西市小学校は、休日にはホタル祭り会場となり、屋台も出て賑わうが、ホタル・シーズンが終る頃になると、子供達が夜集まって「ホタルさよなら集会」が行われる。

児童が全員キヤンドルを持って火文字と点滅するライトでホタルの乱舞を表現しながら、ホタルにさよならを言う。そのあと子供達はさまざまな思いを胸に、ホタルの幼虫放流に出かけていくのである。

(文・写真)藤田良雄





羽田沼の用水路



星野さん(左)と小泉さん

「いやー、この魚が全国でここらにかいなくなっただっていうんだから、たまげるねえー。私らが子供の頃は、どこにでもいたんですがね」と水槽の魚に優しい眼差しを送るのは、保存会の会長の星野正枝さんと副会長の小泉信義さん。

「この魚」とはミヤコタナゴであり、「ここら」とは、一見、どこにでもあるような水田風景、栃木県大田原市羽田地区の羽田沼から水を引く長さ800mの堀(用水路)を指す。

ミヤコタナゴは、コイ科タナゴ亜科アブラボデ属に属する日本固有の小型淡水魚。かつては関東地方全域の湧水

のある浅い沼や、そこから流れでる細い流れや水田地帯を流れる用水路などに生息していた。しかし、近年の開発

## そのまま、ミヤコタナゴ (栃木県大田原市)

や埋め立てなどによる環境の悪化で、その生息水域は急速に減少した。現在、自然環境の下での生息が確認されているのは、羽田地区と千葉県のごく一部のみ。その生息数も少なく、絶滅の危機に瀕している。

ミヤコタナゴは体は薄いかつ色で、下腹部が白く、他のタナゴと比べて小型で、成魚の体長は約4〜5センチ。雄の方がやや大きく、産卵期には腹びれ・尻びれなどにあざやかな朱・白・黒などの色がつく。雌は尾びれのはしまでのびる産卵管を持っているのが特徴。

堀にミヤコタナゴが生息しているのは、いくつかの幸運な原因がある。用水の貯水池である羽田沼から直接水が来るのできれいなこと。湧き水があること。堀は私有地にあるため、一般の人が入れないこと。保存会がミヤコタナゴに熱心なことが上げられる。

「今後は、今年の湧水で被害をうけたので、沼と堀の間に地下水を利用した溜池を作り、堀の水量を一定に保てるようにすること。羽田地区全体を保全地区にすることが目標です。あとは、あまり手を加えずに、自然のままにしておくことですかね」と、星野さんと小泉さんは堀をのぞき込んだ。

「あつ、居た、居たノ」と指をさす二人の姿も、堀同様、少年時代からずっと変わっていないように見えた。現在、ミヤコタナゴは、希少野生動

植物の保護を目的とした種の保存法の指定を受けており、それを契機に「羽田ミヤコタナゴ保存会」が1995年4月に発足した。現在は堀の地権者7人を含む14人で構成されている。

「保存会といっても、特別なことをしている訳ではないんですよ。あまり手をかけずに自然な状態を保つことを心がけているんです」

とはいっても、年に4回の草刈り、堀に溜まった泥の除去、監視、水温の測定、勉強会など、いろいろと忙しい。小泉さんは自宅が堀に近いこともあり、1日2回の水温測定と監視作業を続けている。監視とは、稀少なミヤコタナゴを不心得なマニアが夜にこっそりと捕りに来ることがあり、その防止のためとか。

「ミヤコタナゴも大事なんですが、マツカサ貝の保護も重要なことなんです。それで、堀の掃除が必要になってくるんです」

ミヤコタナゴの生態の特徴の一つに、雌は産卵期(4〜7月)になると、二枚貝のマツカサ貝のエラの中に卵を生むため、その貝の保護もミヤコタナゴにとっては大切なものとなっている。卵は貝の中で水温22〜23度で48時間前後で孵化し、20日前後で、体長8〜9ミリの稚魚となり、貝から出る。成長の早いもので満1年、遅いものでも2年で成魚となり産卵をする。

(文・写真/武田栄一)



▲八木ヶ鼻の岩場(上)で営巣するハヤブサのヒナ(下)(石月英二氏撮影)

# ハヤブサが帰ってきた やさしく見守る地域の人達(新潟県下田村)

「八木ヶ鼻」と呼ばれる岩山にハヤブサが帰ってきて5年目、今年も3羽のヒナが無事巣立って行った。地元の人々は、その様子をそつと我が子の無事を祈るような思いで見守り続けている。下田村は新潟県中東部にあり、東側は粟ヶ岳、烏帽子岳等を経て福島県に接する。奥只見山系に源をもついくつかの清流が合流して五十嵐川となり、五十嵐川は深い森と巨木の茂る林の中

をゆったりと流れ、やがてコシヒカリ米のふるさと、魚沼地方の水田を潤し、三条市へと流れていく。その上流にある北五百川地区は五十嵐川の清流と森、その一角に垂直にそり立つ岩壁・八木ヶ鼻の風景がとくに素晴らしく、この地区は一般に「しただ郷」ともいわれ、新潟県の名勝地の一つに指定されている。ハヤブサが営巣したという岩壁に

は、それを物語るように数カ所にフンなどの跡があり、その親子かどうか、大空に羽を広げて飛んで行く二羽の鳥の姿があった。

## ダム工事の開始で絶滅

早朝の森は川から上ってくる霧で、しっとり濡れ、ケヤキ、ナラ、シイの巨木などが茂っていて、野鳥たちの声が賑やかだ。

八木ヶ鼻のすぐ脇にある八木神社は、八木ヶ鼻の神霊達を祀った神社で、神社にはハヤブサを神の使いとして崇め、それを奉納した江戸時代の木彫刻もあるという。

元教師の宮司石澤さんにお話しを伺った。

「昨日もハヤブサのヒナのピーピーと鳴く声がありました。近くの森で飛ぶ練習をしながら、親からエサをもらっているのでしょう。昔は4月、5月頃には、このピーピーとエサをねだるヒナの声で、村の人は目を覚ましたものです。

昭和40年に、八木ヶ鼻のハヤブサ繁殖地として県天然記念物に指定されましたが、間もなく姿を消してしまいました。昭和41年に、岩場の下で瀕死の状態にいる成鳥のハヤブサを見つけて手当てしましたが死んでしまい、それを剥製してもらったのが最後でした」ハヤブサの剥製は石澤さんの自宅の居間に大切に保管されていた。ワシタ

▼宮司石澤さんとハヤブサの剥製



カ類の中では大型ではないが、飛行が速く勇猛で、小鳥や小動物を捕獲する。灰色の美しい羽、鋭い目、口ばしなど、剥製状況と保存の仕方がいいせいか、今にも飛び立ちそうな雰囲気だ。「ハヤブサがいなくなった理由の第一は、昭和39年にこの奥で笠掘ダムの工事がはじまったことです。山が切り開かれて人間がどんどん入ってきました。八木ヶ鼻前の砂利道をダンプカーがひっきりなしに通るようになり、子育てができる状態ではなくなりました。そのほか、この岩場を県内の山岳グループや学生たちがロッククライミングの練習場に使ったことも大きな原因だったと思います」

## 山林の農薬散布中止や 工事の騒音防止を心がけて

農業をやめ三条市等へ勤める人々が多くなるにつれ、ハヤブサのことはお年寄りや昔ハヤブサに関心のあった中年の人々が時々思い出して「スズメを目掛けて急降下してくる姿はそれは見事だった」とか「ヒナの声が早朝の森にこだました」と語る程度となった。やがて暮らしが安定し、人々は失われた自然や生活の大きな変貌に気づきはじめた。そんな時、平成元年の早朝、八木ヶ鼻で再びハヤブサの姿が見られた。

「トキの二の舞はしたくない。ハヤブサを守ろう」と地元の人々が関係方面に呼びかけ、ロッククライミングの禁止、山林への農薬空中散布の取り止め、子育てシーズンは工事の騒音

等に気配りをする等を申し合わせた。

幸い、八木ヶ鼻周辺地区は昔ながらの自然が残っており、道路や橋は整備されて立派になったが、車の通行量もそれほど多くはない。

「20年ぶりの再来でした。八木ヶ鼻で営巣していたハヤブサは絶滅したはずですから、再来したのは浦浜あたりから移動してきたのでしょうか。元々ハヤブサは海岸の岩肌などで巣作りするのですが、道路や観光開発、巨木のある森などが少なくなり、八木ヶ鼻が見直された、あるいはここ位しかないやってくるのか」と石澤さんは分析する。

八木神社は、古代より崇拜の対象とされ、頂上には神社も祀られていた八木ヶ鼻の神々を御祭神として大同2年(807年)に建立された歴史ある神社で、石澤さんで約50代の宮司となる。樹齢



▲ハヤブサを祀ってある八木神社

数百年の杉などが茂る参道の奥に江戸時代初期の頃建てられたという本殿、拝殿がある。そこに江戸時代にこの地方を制していた村松藩に奉納したと伝えられるハヤブサの木彫刻が2面飾られている。当時の紀行文などにもハヤブサは「八木鷹」「蒼鷹あおたか」という名前前で度々記述されており、古くから人々に崇められていたことが伺える。

## 川辺にはハクチョウの群れも

下田村には「ハヤブサ保存会」といったようなものはないが、ハヤブサを暖かく見守りながら観察を続けている人々がいる。

左官会社経営の石月英二さん、林業経営の若林正道さん、公民館の人々など。保存会を組織しない背景には、会として人為的な活動をする必要は現在のところはないこと、対外的にハヤブサの生息が知られてマスコミやアマチュアカメラマンにおしかけられないようにしたいという配慮があつたことだろう。

小中学生の頃、登校の道すがらハヤブサを見てきた石月さんはその姿が脳裏に焼きついていて。再来を知り、趣味にしているカメラで折ある毎に撮影を続けている。

「知り合いが、八木ヶ鼻対岸に鉄工場を作ったんですが、その頃ハヤブサが居なくなつた。工場の音も一因だったのではないかと気にしていましたので、再来を大喜びし、岸壁のよく見える部屋を撮影用に提供してくれているんです」

石月さんの観察では、平成3年から本格的に営巣をはじめた。2月、3月のまだ雪が残っている頃から雌雄が交代でじつと卵を暖め、ヒナは4月のはじめに孵る。約40日間岩場の巣で親からエサをもらい、5月のゴールデンウィークが終わった頃に巣立ち、その後も

▼観察を続けてきた石月さん



岩場や樹木の中でエサをもらいながら、一人前に成長していく。

「今年は何時まで寒く、最後の一羽が巣立ち終えたのは5月24日でした。無事に巣立つまでは毎日心配です」

近くでは大々的に新橋梁建設工事が行われているが、昔に比べて音も小さくなり影響は少なそうだ。

石月さんの撮りためていたアルバムは何十冊にもなり、三条からカメラ屋さんが現像に日参してくるほどです」と奥さんも苦笑する。

石月さんの家の前には五十嵐川が流れ、アユ釣りの名所でもあるのだが、ここには冬になるとハクチョウも飛来してくるようになった。今年は12月から3月までに約70羽が訪れ、村民にとつて喜びがまた一つ増えたという。

「川辺に住む老夫婦が給餌しており、子供も学校給食の残物などを集めて与えています。生き物が身近にいることは子供たちにとつても素晴らしいことです。私達は野生動物のために何かしてやるということはできませんが、豊かな美しい自然を残していくよう努力していきたいと思えます」と石月さんは語っていた。(取材/浅井登美子)

▼穴から出てきて遊ぶ2頭のクマ



# 「奥山放獣」と自然の再生と ツキノワグマの住める森を (広島県芸北町)

なぜ近年になって熊が人里に現れるのか、山の自然はどうなっているのか。豊かな広葉樹林を擁する西中国山地のツキノワグマに異変が起きている。

## 人里に近づいてきたクマたち

「まぶにクマがいる」と芸北町役場に連絡が入ったのは今年の6月だ。人家から100メートルと離れていないまぶの中にいるという。まぶとは山に横穴を掘り、中の変化の少ない温度差を利用する食糧などの貯蔵庫のこと。発見したのは「そういえばここに昔使っていたまぶがあったはず」とたまたま横穴を覗きこんだ主婦だった。

クマ対策の担当課である産業課の藤井清春さんが急いで現場に駆けつけたが、雨も降っていたせいで、その日にはクマの姿を確認できなかった。晴れた日には穴から出てくるだろうと、次の天気の良い日に穴の見えるところで待っていたら、思ったとおり現れた。しかし、穴からのこのこと這い出てきたのは二頭の可愛らしい子グマだった。二頭は無邪気にじゃれあったり、回りの草むらに鼻先を突っ込んだりし

て遊んでいる。

藤井さんは刺激をせずこのまま放っておこうと思った。きつと母グマが時々横穴にやってきて子グマに乳を与えているはずだし、そんな母グマはむやみに近づく人間に対して凶暴になりやすいことを知っているからだ。

マスコミには知らせずに、近所の人々が子グマたちの遊ぶ姿を見守る日々がしばらく続いたあと、子グマたちは静かに奥山へと入っていったという。

また、こんな話もある。家族で食事をしているときに、家の裏山からクマが下りてきて何か食物を探すような様子で、ガラス一枚隔てたところをしばらくうろろろしてから、再び裏山へと消えていった。その間、家族は箸を手にしたまま動けなかった。

こんなふうにくまが人里近くに頻繁に現われるようになったのは、ほんのここ10年のことだと地元の人言う。

クマが食べ物を探しに人里へ下りてきて、リンゴ園やブドウ園を荒らしたり、カキを枝ごと折ったりする。中には養豚場に入って飼料を食べたり、小豚を襲ったりするという被害が相次い

て芸北町役場に寄せられるようになってた。

\*

ここ芸北町は、広島県の西北端、西中国山地の千メートルを越す山々の中にある人口3400人あまりの小さな町。山々のほとんどは西中国山地国定公園に指定され、2つのダム湖と8つのスキー場を持つ観光レジャーと農業の町だ。町の面積の約88%を占める山々は穏やかな姿形を呈している。そのほとんどは広葉樹の緑に覆われているように見えるが、針葉樹を植林した人工林率も40%近くになっている。注目は、芸北町がこの山々を舞台に、全国でも珍しいツキノワグマの「奥山放獣」を実践していることである。担当している産業課の藤井さんは言う。

「やっぱり山が住みにくくなってるんでしよう。野生の生きものに食べ物を与えてくれる広葉樹の伐採、針葉樹の植林、大規模な宅地やレジャー施設の開発、それに道路の建設や河川改修……。クマなど野生生物の生活圏がどんどんと狭められているのは事実です。それで食物を求めて人里近くまでクマはやってくる。もう死活問題ですからね。」



▲捕獲して麻酔をしたツキノワグマ



▲体重をはかり、発信機をつける



▲まだ雪の残る奥山へ放つ

しかし、藤井さんはいつまでもこういうことを続けてはいけないう。クマだって好きで人里に下りてくるわけじゃないです。クマが下りてこないようにするためにも、昔のように野生動物たちが暮らすことのできる豊かな山に戻していかなければならないし、その環境をどうやって守り育てていくかが問題でしょう」と藤井さん。「奥山放獣」はあくまでもその場を対処するための手段に過ぎず、もともと根本的に取り組むべきことがあるはず、という。

### 戸河内町ではシバグリを植林

戸河内町では、藤井さんはいつまでもこういうことを続けてはいけないう。クマだって好きで人里に下りてくるわけじゃないです。クマが下りてこないようにするためにも、昔のように野生動物たちが暮らすことのできる豊かな山に戻していかなければならないし、その環境をどうやって守り育てていくかが問題でしょう」と藤井さん。「奥山放獣」はあくまでもその場を対処するための手段に過ぎず、もともと根本的に取り組むべきことがあるはず、という。

そしてクマは人里で食べたもののおいしさを覚えて、繰り返しやってくるようになる。人間としては、農作物や家畜に被害を与えられたり、ただ怖いということから、初めのうちは有害駆除という名目で射殺したりすることもありました。しかしそれじやいかんのでした」

かつて広島県のツキノワグマは恐羅漢を中心に冠山、五里山、内黒山、三段峠などに生息し、ほとんど人里に出てくることはなかったという。西中国山地の山々にはブナなどの大木が繁り、エサとなる植物も豊富で、ツキノワグマは山中だけで生活ができていた。それが近年、頻繁に人里にエサを求めて出てくるというのは、クマにとって西中国山地の自然の状態が生息するための限界にきているのでは、という専門家もいる。

### 120頭を「奥山放獣」

九州ではすでに絶滅したと考えられ、四国でも10数頭あまりしか生息していないといわれるツキノワグマ。このままでは西中国山地でも絶滅が危惧されることから、保護の声が上がってきたのは当然のことといえよう。1992年に国が策定した「種の保存法」を受けて、広島県では1993年、どこよりも早く「ツキノワグマ保護管理計画」を打ち出し、ツキノワグマの生息する県内の山林3箇所約570ヘクタールを野生生物保護のため買い上げ、狩猟を禁止し、有害駆除は原則として「奥山放獣」とする方針を定めた。

「奥山放獣」とは、人里で捕獲したクマに発信機付きの首輪を装着し、放獣の際にトウガラシエキスを主成分としたクマ防除スプレーを吹きかけることにより、人間に対しての恐怖心を持たせ、再び人里に近付けないようにするもので、アメリカでは30年以上も前から実践されている方法である。県や周辺市町村の協力のもと芸北町を中心に、ここ数年間で120頭あまりが捕獲されたあと奥山に放獣された。それでも懲りずに人里に下りて再被害を与えたのは2頭のみで、その被害も軽微なものだったという。「奥山放獣」が有効な手段であることが、この数字からもうかがえる。

ひとつは生き生きとした自然の再生である。

「極論すれば、現在のクマによる被害のあれこれは、人間が自分たちの都合のいいように自然を破壊してきた結果として返ってきているものといえるからだ。」

言うまでもなくクマたちが求めているのは、エサが豊富にある豊かな森だ。かつての豊かな広葉樹の大木の森へと、今の山林を変えていくのは並大抵のことではないが、それに取り組み始めている町がある。芸北町となりである戸河内町だ。

戸河内町では町有林の一部にシバグリなどを植林した森づくりを進めている。平成四年から始められた事業で、各山に分散しながらもすでに20ヘクタールの植林を行った。今後も毎年5ヘクタールずつ森を増やしていくという計画だ。この事業は町内の過疎対策、林業の活性化も兼ねたもので、実はクマに、材は町民に、という発想から生まれている。

### 県を越えて4町村で話し合いと森づくりを

もうひとつは人づくり、と藤井さんは言う。

「こうして奥山放獣を始めてからツキノワグマの数はきつと増えているはずなんです、その実数がいくらなのか、生息範囲はどのあたりか、一頭の行動

範囲はどれくらいか、毎年のエサの状況はどうなのかなどまだわからないことがたくさんあります。」

戸河内町や吉和村で放獣されたクマが島根県の弥栄村で発見されたり射殺された例もあります。きちんとした調査が必要な時期にきていますね。それには獣医や保護団体、植物や山の様子に詳しい人なども参加して…組織までとはいかなくても、野生生物保護ボランティアのようなものがあればと思いますね。そして調査の結果を待って、ツキノワグマとの真の共存の方法を模索して…、いや大変な仕事だ」と藤井さんは笑う。

その一環として、ツキノワグマの暮らす西中国山地の島根県匹見町、広島県吉和村、戸河内町、芸北町の4町村は、広域的に様々な問題に対応していくというクマ対策の連絡会議をつくり、話し合いを始めている。

県境を越えた新しい地域の連携、豊かな自然の森への再生。ツキノワグマの人里への出現は、便利さや快適さにかこつけた人間中心の考え方を転換させてくれるものだった。そしてその新しい認識の上に、きつと素晴らしい共生の道が開かれるのだろう。

(取材/矢島浩三)

動物とふれあう観光地

## マタギの里の熊牧場

(秋田県阿仁町)



◀仔熊と遊ぶ子供たち。

センター内に「マタギ資料館」を、また丘の上の山麓には「町立熊牧場」を開設した。奥には日本の滝百選の「安の滝」がある。

收容しているツキノワグマは、町周辺にいた熊が中心で、当初は30頭ほどだったが現在は50頭ほどになっている。広い園内で元気に遊びまわる仔熊は子供達にも人気があり、春は生まれた仔熊を子供達が抱いたり一緒に遊ぶ体験教室もある。「熊は獾猛で怖いというイメージがありますが、豊かな森の住家とエサがあれば危害を加えることはなく、やさしくおとなしい生き物。この辺でも熊を身近に見る機会が減多にないので、熊とマタギの暮らしを学ぶ機会にしてほしいと思います」と担当者。

秋田県の中央部にある阿仁町は、県内第5位の広大な面積を有し、その96%が山林。山深い里の人々は狩猟に従事、マタギ独特のしきたりや言葉、信仰を伝承してきた。中でも打当地区は、周辺を県立公園森吉山に囲まれた山深い里で、打当マタギとして知られる。

マタギ用具126点は昭和34年に秋田県重要民俗文化財の指定を受けており、これらを中心にするさとセ

将来は山で健全に繁殖していけるような役割も担ってほしい」と語っていた。開館は4月下旬〜11月上旬。午後4時まで。

とう地  
動物あ  
ふれ観

## 過保護にせざる野生に近い状態で 波勝崎野猿公苑(南伊豆町)

伊豆半島南端にある波勝崎は東日本最大の野猿の生息地で、波勝崎苑には周辺の山に生息するサルを含めて約300匹がいる。

サルとの出会いは、地元に住む肥田余平氏が炭焼きで波勝崎の山へ入った時弁当や好物のサツマイモを与えて次第に餌付けしたのが始まり。昭和32年にサルの生息に詳しい専門家が調査に入り、サルを自然に近い状態で餌付けし、人間との共生をはかることをめざし、伊豆地区の観光事業として野猿公苑を開設した。人の訪れることのない入江だったが、バスや定期船も運行されるようになり、伊豆観光の一つとして人気を集めている。

平成3年までは伊豆区長が苑長を勤

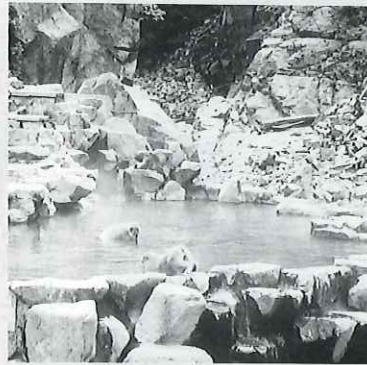
めるといふ半ボランティア活動として運営してきたが、平成4年より企業化体制になった。同苑で働いている人は売店を入れて25人。

「地区の人がみな株主で、若い人にとっても魅力ある職場になっています。現在13代目ボス「伊豆の佐太郎」の傘下に150頭おり、頭数は特に増えていません。できるだけ野生の生態系を保全していくよう、観光化下にも節度を心がけています」と松本苑長は語る。

幸いなことに、ここは一年中気温が温暖で、周辺はエサになる木の実は豊富な原生林。山で生息することも充分可能で、近くには農家や人家がないため猿害も少ない。オスは3、4歳になると新たなテリトリーを求めて旅立っていくケースもあり、反対に、冬も暖かい当地をめぐりて他国(箱根、伊豆山)から侵入してくるものもいる。しかしメスを得てファミリーを持てるオスは限られており、猿社会も結構厳しい。

苑内へ行くと、観光客を無視して山の斜面で無心に遊ぶ子サルや、ファミリーのために近づいてくる人間を威嚇するオスもいて、野生味豊かなサルたちに出会える。

## ● 増え過ぎた観光地のサル 新たな試練の時



地獄谷温泉のサルたち

観光のためにと餌付けした野生のサルが増えすぎ、周辺の農家や商店でいたずらが増えてきたとか、餌付け等で頭数が大幅に増えてきた反面、観光客の伸び悩みで、観光経営が成り立たなくなつた等、観光地のサルはいまさまざまな問題を抱えている。

サルの入浴でも有名な長野県山ノ内町の地獄谷野猿公苑には約400匹のサルが周辺の山からやってきて谷底の温泉につかる。開園当初は25匹のファミリーだったが、リンゴや大麦等の餌付けて大幅に増え、最近では公苑から約3キロ離れた洪温泉にも遠征してきて青果店や畑のリンゴを横取りしていく。猿の急増を懸念してきた町や苑ではその対応策として、環境庁の許可を得て約50匹のメスの避妊処置を行った。

避妊方法は、交尾期に発情しないホルモン剤の皮下注射の場合と、二度と子を産めないようにする卵管手術の二種。前者は野生に戻ることとを考慮して二、三カ月で効果がなくなる注射だという。

サルの研究で知られる京大霊長類研究所では、猿害を起こすサルを捕殺するのではなく避妊具を使って増やさないようにするよう呼びかけ、サル用子宮内避妊具(人間用の1/5の大きさ)の装着等を提案している。避妊の効果はあるがホルモン分泌等の変化はなく、オスサルの態度にも差がないという。

「野生のニホンザルの場合、増加率は3・3%程度で、現在の捕獲数はそれを上回っている。猿害を減らす名目でこのまま射殺や捕獲が続くと将来ニホンザルは絶滅に追い込まれる。観光地のサルも餌付け制限や避妊の工夫で野生に近い状況に戻すことが必要だ」と同研究所では警告している。

大分市の高崎山では当初の200匹が40年間で2000匹に増え、一日の餌のカロリーを半分以下に減らした。大阪府箕面市では20年前から山に餌場をつくり、里の被害を減らしている。

いずれにしても、人間の勝手な関与で増やされたり捕殺されたりしてサルたちも大迷惑、厳しい試練は当分続きそう。



# 川や湖を魚の宝庫に

サケは漁業者と行政機関が一世以上をかけたつくり出した漁業資源だが、河口での捕獲により川を遡上するサケの姿は消え、サケをエサにしてきたクマや猛禽類たちの繁殖を困難にする一因ともなっている。

サケ・マスに川に戻して、有効利用をはかろうという試みが標津町忠類川ではじまった。サケ釣りを楽しみながら採捕調査を行う。

また、然別湖（鹿追町）では、道の天然記念物に指定されるオシロコマの回復をめざし釣人らが密猟監視やゴミ収集に立ち上った。



▲▶ 忠類川でサケ採捕調査をするフライ・フィッシャーたち。  
▼釣ったサケは数量、重さ、長さ等を記録する。



生まれた川に戻ってくるサケの習性を利用して、日本では各地でサケの稚魚を放流。安定して豊漁が続いているが、一方で海外からの輸入ものが増大して価格が下落したり、魚体の小型化などの悩みも増えてきた。

サケの放流量、漁獲量ともに日本一を誇る標津町には町立「サーモンパーク」などもあり、文字通り「サケのまち」。

町のほぼ中央を流れる忠類川は毎年5000〜6000尾の秋サケが捕獲されてきたが、平成7年度に実施された全道的な捕獲河川の見直しにより、町漁業組合の運営する忠類川の捕獲事

## （忠類川をサケ・マスが上る） 恵みの川へ（北海道標津町）

業は廃止となった。

その結果、相当量のサケ・マス（カラフトマス）の遡上が見られるようになった。

町ではサケ・マスの有効利用方策として、

①サケ・マスの自然産卵の観察など、住民への環境教育の場としての活用  
②食料としての活用  
③将来のサケ・マスを対象とした健全なレクリエーションの場としての活用を計画している。

この③については「釣獲の時間や場所、飼料、遡上量の違いと釣獲との相関関係を明らかにする」ことを前提に、実際に釣ってみて調査することになったのである。つまり、北海道でははじめて条件付きながらサケの釣りが可能になったのである。

一部で「サケ釣り解禁」と報道されたようだが、北海道では河川でサケ・マスを釣ることは法律で禁じられており、現段階ではあくまでも「特別採捕調査」のための釣獲ということになる。

しかしフライ・フィッシャー達の期待は大きく、町が採捕従事者（釣人）を募集したところ2537人が応募、



8月から12月までに実施した「調査」では延4440人が参加、約6500匹（一人当たり1.45匹）が採捕された。サーモン釣りはカナダへ行くしかなかった釣人にとって忠類川での釣りは「夢の実現」とも言えるもので、「サケの町」として今後一層注目を集めようだ。

忠類川は人家などがない大自然の中を流れる「暴れ川」の異名を持つ川。砂防ダムの建設が予定されたこともあるが、「ダムよりも植林などによる自然の力による治水が大切」と漁業従事者からも意見が寄せられ、極力自然を壊さない形で流木止め工法が採用された。地元有志が無理を承知で知事に忠類川の視察に来てもらった時、一匹のサケが川を上っていくのを偶然見て、知事も「北海道でも数少ない生きた川」と大鼓判を押してくれたというエピソードもある。

川には十数種の淡水魚も確認されており、地元の人々は、さらに自然の河川に近づけて昔のように魚類の宝庫に復活したいと期待している。サケの産卵行動などが観察できれば町おこしの新しい目玉にもなる。

現在は「熊出沒中」の看板をかかげ、釣り上げた魚を川岸に放置しないように呼びかけているが、自然産卵するサケ・マスを狙ってヒグマの出沒も確認されており、豊かな自然の恵みの川へと前進している。

## 「北の宝石」オシヨロコマを守ろう 然別湖の保護・育成活動（北海道鹿追町）

然別湖のオシヨロコマは、全国で唯一、湖に生息して独自の進化を遂げた魚で、湖の北側部分は道の天然記念物生息地水域に指定されている。

別名ミヤペイワナと呼ばれ、採食エラの「さいは」器管が4〜7枚多い固有種。

かつては産卵時期には流入河川のヤンベツ川が真っ黒に染ったというが、珍しさも手伝って、乱獲や密猟が続き、さらに周辺の環境変化もあり、めっきり減少してきた。

町では昭和37年から人工孵化事業に取り組み、56年からは禁漁期間を設ける等の対策を講じてきた。

「オシヨロコマを守ろう」と立ち上ったのが今まで調査や放流に協力してきた町民約40人。「ドリーバーデン」（米国のオシヨロコマの通称）という名前の会で、今年3月末に設立された。

メンバーは町内の釣り愛好家を中心に農家、自営業、公務員などさまざまなたで構成され、①密猟の監視 ②稚魚・標識放流事業 ③湖周辺の環境美化などに協力していく。

中でも密猟監視は町職員2人にネイチャーセンサー員らが行ってきたが、

春先はオシヨロコマが湖面近くに浮上するため大勢の密漁者が侵入し手がつけられなかった。

同会では多人数で定期的に監視を続けていく予定だ。

然別湖の川岸にそぐヤンベツ川沿いの孵化場では、毎年30万匹等を放流し、養殖事業に取り組んできたが、ウグイなどに捕食されて資源増加につながらないため、一昨年から一年魚の放流に切り替えた。5月末の雪溶けを待って体長15cmほどに成長したオシヨロコマを順次放流する。毎年秋に調査を行うが、一年魚は定着が確認されている。漁協では孵化事業にさらに力を入れ、今年は昨年を1万匹以上上回る6万匹を放流した。

秋には採用に捕獲する「然別湖試験解禁釣り」を一般にも公募したが、全国から21倍を越す参加申し込みがあった。

今後も町と漁協、町民の三位一体によるオシヨロコマの保護活動を行いながら、魚を活かした町づくりについても話し合っていく。

（高橋章）



▲オシヨロコマの1年魚の放流と生息調査（提供／鹿追町役場）



# タンチョウと共に40年

## 給餌活動をする人々を訪ねて

コシの支給を受ける給餌ボランティアは鶴居村、阿寒村、標茶町などに約30人いる。「子供や孫よりも可愛い。私等の生きがい」と語るお年寄りたち。親の意思を継いで帰郷し給餌を続けたいという息子夫婦も出てきたという。

タンチョウが飛来することで有名な鶴居村の渡辺トメさんは、ツルおばさんとして知られる世話係の第一人者。「しばれる冬サ、一生懸命生きているんだもの、まんずツルほどめんこいものはないヨ。孫は十日に一遍やってくるけど、ツルは毎日やってくる。大事な家族の一員だね」とトメさんは言う。タンチョウとトメさんの本格的な出会いは昭和30年頃から。それ以前にも遠くの方から眺めることはあつた

「ツルを死なせてはならない」と村人の手で給餌が始まった。乏しい食糧を切りつめたり、ツル用にトウモロコシの耕作を増やすなどして対応した。トメさんの家から数百メートルのところに下雪裡小学校があり、学校でも子供たちが役場から支給されたトウモロコシを与えていた。休日の給餌を手伝っていたのがトメさん。「忘れもしない。あの日は凄く吹雪で2mも雪が積もり1m先も見えない。体育館までたどり着くどころかこちらが凍死してしまいうるので、やむを得ず引き返そうとしたの。その時、タンチョウの切なそうな鳴き声が聞こえてきた。それを聞いて、ツルたちは猛吹雪の中で必死に耐えているんだ、頑張らなくちゃあと思った。いつもは10分ほどでいける学校に1時間以上かけてたどりついた」

人の背丈ほどもある真っ白い体、翼の先と首だけ黒く、頭のとっぺんが赤いタンチョウは優雅な姿としなやかな身振りなどから日本人にはとりわけなじみが深く、長寿と幸福のシンボルとして人気がある。

昔は北海道だけでなく、西日本の広い地域に分布していたが、明治時代になると乱獲されて絶滅したと思われていた。大正時代の終り頃、釧路湿原に数十羽が細々と生き残っているのが発見され、その後地元の人々の手厚い保護で、現在500羽以上に回復している。

絶滅を免れ、数を少しずつ増やしてきた背景には、エサのない冬期間、何十年間欠かすことなく給餌を続けてきた人々の地道な努力があった。

現在環境庁からエサにするトウモロ

### ツルはめんこい家族の一員

鶴居村 渡辺トメさん



ところが昭和27年の冬、釧路地方を寒波と猛吹雪が襲った時、湿原でエサがとれなくなつたツルがふらりと村のトウモロコシ畑に現れ、越冬用に積み上げてあつた落ち穂をつい

以来トメさんは40年以上、一日も欠かさずエサを与えてきた。小学校は廃校し、トメさんの畑の給餌場には冬には200羽以上がやってくる。タンチョウは国の天然記念物に指定



▲給餌をする渡辺さん(釧路NPO提供)

され、昭和40年以降は環境庁よりトウモロコシが支給されるようになった。普通、給餌は10月から3月までで、春から秋までは湿原で自立して餌を取るように仕向けているが、トメさんの畑には春でも平均10羽ほどがやってくる。「湿原でエサを取れない若いツルが、里へ来て農家が蒔いた種や発芽したばかりの野菜を食べるのさ。そうすると何とかしてくれて連絡がくるので、よその畑を荒らさないようにと最低限のエサをやっている。人に慣らされて少しずつ増えてきたことは嬉しいけれど、慣れるとまた問題も出てくるん

だ」

トメさんが気にしているのは、湿原周辺の開発はめざましく、湿原へ流れ込む豊かな川は変貌し、エサとなる魚や草が減っていること。一方でタンチョウを見るために訪れる観光客は年々増え、マナーの悪さも目につく。トメさんはエサを支給してもらっているからと村に協力して「鶴見台」という看板をだし、見学者のための駐車場や見学場所を作った。

「多い日は20台もバスがやってきて、みなトイレなどを使っていく。掃除や費用も大変で、入場料を少し取ったらといわれるけれど、お金をとったら大事な孫を売るようでイヤ。マナーを守って見学する人はいいけど、今の時期(春夏)にきて「ツルがないんじゃないの」と怒るおばさんなんかがいる。いろいろな人が見にくるけど、いま一番悪いのはお母さんたちだね。遊び慣れているけど、きちんと学ぶとか自分で何かすると言うことを忘れてる。まだ学生たちの方が素直でマナーもいいよ」

取材に訪れた日は、駐車場に設置していた自動販売機が早朝何者かに壊され、現金がすべて持ち去られるという事件があった。「いやだね、こんな静かな平和の村なのに」

そのせいか、トメさんの歯切れの良い毒舌はいま一つ冴えない様子だった。

## 「サンクチュアリ」と協力しながら

鶴居村 伊藤良孝さん

鶴居村北部

郊外の伊藤良孝さんの畑には冬になると多い日は約300羽近いタンチョウがやってくる。給餌は10月1日から3月末まで。10月頃は若いツルや若いペアが約30羽ほど、11月になると幼鳥

をつれた家族が多くなり50羽ほどになり、12月から2月が一年間でもっとも多くて200羽、最高300羽がやってくる道内最大の給餌場。「その頃になると一日60キロのトウモロコシを与えるため、作業は結構きついね。エサは沢山やればきりがないけれど、ひと冬7トンと決めて、来るツルの数に応じて袋分けしとくんです」それ以外の時期、4月から9月までは一切給餌しない。エサを欲しがってやって来るものもあるが、湿原の方へ追い払うことにしているという。

「人に慣れすぎではいけないからね。近づかないようにいろいろな機具を使って追ったこともあるが、人海作戦が一番。いまは日本野鳥の会の『サンクチュアリ』の人達がパートを2人使

って湿原へいくように仕向けています」と伊藤さん。



伊藤さんは大正14年に岩手県北部から両親について入植した。戦前は乗馬用の馬を生産、戦後は10年ほど農作物作りをしたあと、バンエイ競馬用のペルシユロン種の生産と酪農へ。畜産には土地が50町歩は必要だと農地の購入と開拓をしてきたが、息子はよそへ働きさんと二人暮らし。

早くから日本野鳥の会の会員で、地元タンチョウ保護グループのリーダーとして活動してきた伊藤さんは給餌場を含めた13畝を日本野鳥の会に提供、同会では87年に「サンクチュアリ」を開設して、タンチョウとその生息地を守る活動の拠点にしている。

伊藤さんの家の隣に立つ「タンチョウ・サンクチュアリ」では、会員たちが交代で勤務し、生態調査、給餌場や繁殖地の維持・管理等に当たっている



親子ツル。子別れが近いヒナ（右）はエサを満足にもらえない（永田さん撮影）

## 給餌は私たちの生きがい、 タンチョウに感謝しているんです

標茶町 永田勝巳夫妻



▲永田さん夫妻。家の前の畑でエサをやる。

種をついばみだしましたが何と素晴らしい鳥だろうと見ほれてしまいました。娘の誕生にあわせてやってきたツル、これもなにかの縁かなと給餌を始めました。娘は嫁ぎ孫と時々出かけてきますが、ツルは今も欠かさず毎日やっています」と久子さん。

永田さんの家のすぐ近くの畑に来るのは平均一組の家族で3羽。標茶町では3〜5羽が普通で、タツカリ湿原といわれる谷地でそれぞれペアを組んで一年中暮らしているという。

夫婦にとって辛いのは子別れのとき。「今まで子供を連れてきていた親が、2月頃になると、子供の頭を激しくつついてエサを食べさせないんです。そんなことが一週間はかり続くと、もう子供は親と一緒にこなくなる。子別れとわかっていても切なく、子供は無事一人で生きているかしらと気になりますね」

他、開発が進む湿原を守るため湿原の購入にも力を入れてきた。

現在までに鶴居村の温根内湿原を20畝、根室市東海の特田を7畝、原岸町系魚沢の民有地を284畝購入。何組かのペアが繁殖している。

「入館料も見学料もないから運営は大変だと思っけれど、若い人達がボランティアで頑張っていますよ。こういう人達に甘えてばかりいないで行政はもっと自然保護や動物保護に力を入れるべきです」と伊藤さんは言っていた。

釧路湿原の東北部に位置する標茶町には名のない湿原がいくつかあり、タンチョウにとっては貴重な繁殖地の一つになっている。同町でも5人ほどが給餌活動を続けている。

戦後間もなくタンチョウが畑に現れて以来、わが娘のように見守ってきたのが永田勝巳さんと奥さんの久子さん。「あの日のことは今もはっきり覚えています。昭和23年の9月4日、私は長女を身籠っていてもう出産間近でした。ソバを蒔いた畑にツルがやってきて、

「ここらは酪農家が多く、昔あった大木や林はほとんど姿を消したので、谷地は乾燥化がすすみ、決してツルに棲みやすい場所ではなくなっています。そのため特別にお願いしてエサの量を少し増やしてもらい、一年中やるようにしています。タンチョウ以外にもいろいろな野鳥がエサを待っているんです」

永田さんは40年間観察日記をつけてきた。50年近い年月の間には、何度か

「その頃は求愛のダンスも活発で、オスがメスに乗って交尾したあとは、身をかめ羽を広げて頭を下げ、ありがとう」という仕草をするんです。人間の夫婦なら只乗りでしょう。自然の中で激しくたくましく、でも折り目正しく生きているタンチョウに、人間が学ぶことって沢山あります。給餌は私たちにとっての生きがい、タンチョウに感謝しているんですよ」

夫婦にとってツルの訪問は何よりも楽しみで壁には折々にとった写真が沢山貼ってあった。（取材/浅井登美子）

都市からの報告 1

# 「もう時間がない」 瀕死の丹沢から鹿を守れ!

丹沢や奥多摩は都市生活者にとって生物や自然とふれあう貴重な場所。しかし樹木の立ち枯れや開発等で鹿やサルの被害、餓死が増大、問題は地方以上に深刻だ。多くの専門家や自然保護グループが調査研究、共生への方法を模索している。



▶樹木の立ち枯れが目立つ山稜(塔ノ岳あたり)



鹿に樹木の皮を食へられたと思われる木。



▶研究者たちが円沢をフィールドにさまざまな調査、研究をしている。(大気汚染測定)

### ●ブナ林やスズタケの立ち枯れが進行

蛭ヶ岳(1673m)を最高峰に神奈川県西部から山梨県に連なる丹沢山塊は、年間90万人が登山やハイキングを楽しむ都会のオアシスであり、また水源涵養林、杉や檜の生産林としても貴重な財産である。

ところが、ここ10数年、「丹沢が危ない」「死にはじめている」という声が丹沢に関するいろいろな専門家や保護グループから聞かれるようになってきた。

とくに、1400～1500mの主稜線塔ノ岳、丹沢山、松洞丸あたりでブナなどの樹木、スズタケ(下草の笹)の立ち枯れが目立ちはじめている。霧にけむる山稜を歩くと、

枝先が朽ち落ちた幹は黒々とした墓標に見える。

原因は周辺工業地帯や高速道路からの排気ガス、酸性雨霧に加えて病菌説などもある。大規模なスズタケの立ち枯れ、退行は、鹿の菜食による害、天狗巢病説などが言われており、スズタケは冬期積雪時の鹿の非常食であることも事実だ。

近年は越冬期を乗り切るために不可欠だったスズタケも少なくなり、樹木の皮を食べる害も増えている。木も一回り剥皮されると枯れるそう。

立場の悪いのは鹿。害獣だから駆除して欲しいという声も出てくる。しかしかつては相模の平野を闊歩していたのが追われ追われて苦手な山地に閉じこめ

られた被害者である。大山丹沢山塊で2000～3000頭といわれたニホンカモシカも現在800～2000頭ともいわれ、全体としてかなり減少傾向にあるようだ。登山者に人気のサルも近頃ではその姿を見ることは少なくなり、野生動物たちに異変が生じていることは明らかだ。

### ●一冬に20～30頭が餓死

丹沢でニホンジカの生息実態調査を続けている古林賢恒さん(東京農工大学)の案内で、雪の残る遅い春の堂平のブナ材から丹沢山を歩いた。

古林さんは丹沢の鹿がなぜ標高800m以上に生息しているか説明する。

人間の生活圏の拡大で山地に追いやられた鹿が棲む400～800mの山地は杉、檜が植樹された人工林。そのため食害防護柵が張り巡らされ、鹿は山麓と高地に分断され、それぞれがいくつかのグループを作って生息している。

「ニホンジカが高地生息をするのは自然の姿ではないんです。鹿を含む生態系の多様性を維持するために、早急に保護区の設定の仕方、林業のあり方、狩猟のあり方、植生の回復の手法等を、行政を含めて検討し直し、大胆な保護策を打ち出す必要があります」と古林さんは強調する。

古林グループの学生が、水枯れした沢で子鹿の死骸を見つけた。古林さんは足の骨を右で割り、そのやせた髄を見て餓死したことを確認する。鹿の頭は切り離して研究用に持ち



▶餓死したらしい鹿の死骸を発見。説明する古林さん。

帰る。雪の多い冬は20〜30頭の鹿が餓死している」と古林さんは暗い表情で語った。

### ●アオキ葉や茶殻を差し入れ

古林さんら丹沢の動植物の調査や自然保護活動の拠点となっているのが丹沢・札掛にある国民宿舎「丹沢ホーム」。御主人の中村道也さんは丹沢自然保護協会の会長であり、丹沢動植物の「代理人」とも言える人。父親の故中村芳男氏は、丹沢をはじめ日本各地の自然保護、鹿などの動物の保護に尽力してきた。二代目道也さんも鹿のために駆けずりまわっている。

「丹沢ホーム」には野鳥観察、魚釣り、登山など丹沢の自然にふれたい人々が集まっているが、11月になると中村さん達は特に忙しくなる。狩猟が解禁になるからだ。

ここ一帯は鳥獣保護地区なのだが、猟犬を



▲足柄の山でアオキを採取するボランティアの人達。ビニールに包んで丹沢ホームへ運ぶ。

▼ブナの植樹も始まった。当分は冬期間は苗木をしっかりと覆って鹿の食害を防ぐ。



山に入れて猟区に鹿を追い出して射殺する者や夜ライトで鹿を照らして撃つ悪質な密猟者がいる。丹沢のシカ問題連絡会等のグループが毎年11月〜12月に行うパトロール調査では、10年間に461個のククリワナが発見された、と報告している。他のグループや県が独自に行なってはしつめたものを加えると、その数は相当数になると思われる。

そのため中村さん達は一日数回指導パトロールを行い、禁猟になるまで続けられる。

密猟は丹沢以外でも行われ、シカが増えすぎていくという理由のもとで公然と射殺、その数量も報告されていないケースが多いようだ。

「丹沢ホーム」では、冬期のシカの生態調査の一つとして6年前からアオキ葉の給餌を行なっている。

ホームの職員やボランティアが足柄辺りの

許可をもらった山からアオキの葉を数週間分づつ採取してきて、それを柵のある給餌場と与える。同時に食前食後の鹿の体重、葉の量等を計測し、ビデオで個体を記録する。これは鹿の実態を知る貴重な資料にもなる。

丹沢ホームには子供達や老人、主婦から茶殻も届けられる。学校給食の時のものや家族で少しずつ貯めたものが手紙と一緒に届けられる。

冬の札掛を訪ねると、雑木の向こうの日だまりで茶殻をつまむ鹿の群れを見ることができた。

### ●「コリドー(回廊)づくりを」

今年6月29日、中村さんらの呼びかけで、自然保護関係団体や文化人が多数参加して「コリドー(回廊)フォーラム」が開かれた。

ブナや広葉樹の林を全国各地に育成し回廊をつなぐというもの。コリドーがあれば、植生と動物の生活する場のバランスがとれる。十分の広さが確保される。丹沢の場合、丹沢から高尾へ、箱根へ、山梨へと動物が往来できるようになる。大仕事だけれど回廊づくりは多様な生き物が息づく豊かな森を取り戻すために不可欠だと中村さんは言う。

さらに中村さんは、「丹沢はもう時間がない」と新たな活動も開始。人間の勝手な定めた現在の鳥獣保護区を拡大するしかない」と林野庁や営林署を訪れることから始めている。

(文・写真/小林恵)

# 世紀末の東京、ニホンザルの森に何が起っているのか。



▶ハリエンジュの開花期は春から初夏。サルたちは好物のその花を求めて森の中を移動する。  
(撮影/白井啓・成毛茂明・井口基氏)

●1、2000万人の人間が暮らす東京。その大都市東京からわずか30キロ圏の距離に、野生

のニホンザルの棲む森がある。西多摩郡桧原村。村の大半が秩父多摩国立公園に含まれるこの山あいの村は、れっきとした東京都である。この村に棲む野生ザルは縦横に広がるこの森の中で、連綿と野生のいのちを繋いできた。その森が変わってきた。人間社会の影が色濃く映しだされた世紀末の森は、サルたちの暮らしをどう替えようとしているのだろうか。

## ●山の中を30kmも移動する群れ

サルたちの群れを偶然目にしたのは初夏の日の昼下がり。東京の西、桧原村の林道だった。子ザルを連れた20頭近い群れが沢から登

ってきて、林道をゆっくりと横切り、ニセアカシアの花の咲く藪の中へと消えていった。それは何とも感動的な光景だった。

東京には現在、桧原村を中心とする南秋川地域に5〜6群、約250頭と、多摩川上流の奥多摩地域に4〜7群約180頭のニホンザルが生息するといわれている。この時期サルたちはニセアカシアの花やヤマブドウの実、モミジイチゴの果実などを求めて山の中を移動して歩く。

このサルたちを追って、長年調査・研究を続けているのが、野生動物保護管理事務所の研究員白井啓さんだ。白井さんの所属する野生動物保護管理事務所は野生動物による被害とその対策のために、行政機関からの依頼を受け実態調査等を行なっている。調査対象となるのはクマ、シカ、カモシカ、サル、タヌキ等と多様だが、白井さんの研究対象はニホンザル。調査のためのフィールドは、主に奥多摩地域と南秋川地域だ。

特に彼が長年追いつけているのは南秋川の小坂志林道周辺に生息する群れで、一週間もの間、発信機を装着したサルとその群れの行動を追う、森の中で観察を続けることも度々



▶森に食物が少ない冬場は畑に出てくる。人間が根気よく追い払い、畑が危険な場所であることを学習させることが大事だ。

あるという。

小坂志林道の群れは四季を通じて広葉樹林、スギ、ヒノキの植林、ブッシュ、農耕地などを、かなり広範囲に移動して歩く。これ



は若葉や木の芽、果実などの多い春秋には標高の高い広葉樹林帯を歩き、食べ物の少ない夏冬には標高の低いブッシュや植林地、農耕地などへ出て、クズの葉やヤマイモの葉、植林地の下の草、農作物などを採食するため、季節に応じて環境を選ぶ必要があるからだ。

生息地内に採食できる場所が少ない群れは、広い範囲を移動しなければならない。白井さんの調査では小坂志の群れは少なくとも、31・1km<sup>2</sup>の遊動域を持つという。

このサルたちが山を出て麓の農家に出没することがある。森の中に食べ物の少ない時期、サルたちは畑のジャガイモやカボチャや麦を食べることを覚えてしまった。山間の斜面の畑を耕し、苦勞して作った作物を食べられてしまう農家にとって、これは何ともやり切れないことだろう。

## ●「猿害」は防げないのか

6月、朝日新聞多摩版にこんな見出しの記事が載った。「頭痛い猿害対策―農作物をサルが食い荒らす猿害をどうしたら減らせるか」

記事によると八王子市西部の山間部で野生のニホンザルが畑を荒らし回る被害が広がり、主に秋から春にかけてハクサイ、ニンジン、カボチャ、サツマイモ、ジャガイモ、トウモロコシ、ラッキョウなど、畑の作物が根こそぎ被害に遭っているという。猿の被害が目立ち始めたのは1983年頃からで、隣接する松原村から山を越えてやってくる群れが中心で、正確な生息数は不明とのことだ。

市経済部では昨年度の被害総額を「250万円」としているが、市場出荷している農家が少ないため、実際の被害額は正確に把握で



▶クズの種はサルにとって冬場の貴重な食糧となる。どこへ行けば何があるかを熟知しているサルから人が学ぶことも多い。



▶ラジオテレトリー法という調査のために電波発信機を装着されたサル。これにより群れや個体の行動が正確に追跡できる。



▶サルたちが夜を過ごすことの多いスギやヒノキの植林地。枝のびた林の中は雨風をしのげて格好の寝床となる。

きていない。市では地元猟友会に捕獲を委託しているが、ハンターもサルを撃つのは「当たりがある」などの理由から好まず、捕獲は難しいという。

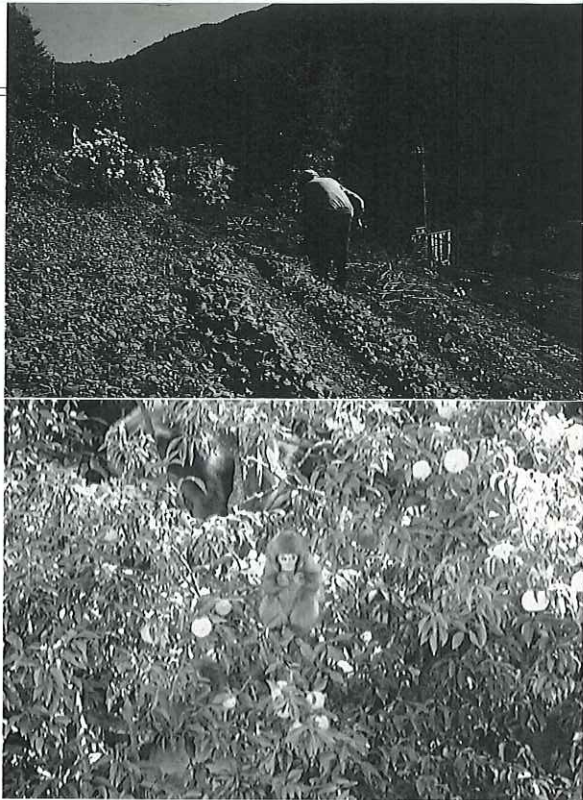
八王子市では2年前から隣接する松原村、あきる野市、東京都西多摩経済事務所、同南多摩経済事務所、東京都林業試験場などと一体となり「猿害対策協議会」なるものを発足させたが、「思わしい効果は上がっていない」(協議会担当者談) というのが現状のようだ。現在とられている措置は「トウガラシ爆弾」と呼ばれる爆発物や、ロケット花火を使ってサルを威嚇したり、畑の周囲にネットを張ることなどが、利口なサルに対しては余り効果的とは言えず、他にこれといった手立ても見つかっていない。

猿害対策協議会の話では、

「今はただ畑に出てきたサルを追い払うのが精一杯といった処ですが、やはり有害な動物はサルに限らず駆除という方向で管理していく必要があると考えています」と、どちらかといえば捕獲に積極的だ。

「これ以上増えて人でも襲うようになったらもっと大変ですから」と協議会の担当者は念を押した。

一方、松原村役場にも、農家からの「猿害」の苦情は多い。これに対し役場がとっているのは、捕獲の他、主に「トウガラシ爆弾」とネットの措置だ。ネットは房総の漁師から譲り受けた魚網を使いこころみているが、サルが網についた塩の味を覚え、これを噛んでいるうちに網が破れてしまうことが多い。他に一部の地域では電流の流れる電気柵の設置



▶急斜面の畑を守っているのはお年寄りばかり。サルはそのことをよく知っていて、若い働き手のいる山村へは決して現れないという。下はユズ畑のサル。

を試験的に行なった。これは完璧ではなかったが、それなりの効果を上げたという。

この檜原村の「猿害」対策のための予算は年間約70万円。予算の多くは爆竹や花火などの消耗品と、地元猿友会に有害駆除を委託する、その委託料に使われている。

地元猿友会のメンバーの一人は「シカやイノシシを撃つのと違って、猿を撃つのは我々も余り気が進まないんですよ。でもやっぱりサルは増えていきますからね。村としてもいろいろな防除をやっているんだけど、まだこれといった決め手もなくて、やっぱり駆除という方法に頼らざるを得ないんじゃないですか」

と有害鳥獣駆除の必要性を説く。サルは実際に増えているのだろうか。

東京都の「日本サル生息実態調査報告書」によると、分布が最も退行した昭和20～30年

代に比べると、サルの数は確かに増えているが、最近の10年間はそれ程増えていない。特にニホンザルは1産1子で初産は約6歳と遅く2年に1回程度しか出産しないので、急激に個体を増加させることはできないという。

地元の人たちが、サルが増えたと感じているのは、おそらく群れの個体数そのものではなく、畑に出てくるサルの数が増えたことによるものだろうと、調査にあたった研究者たちは推察している。さらにこの報告書によれば、有害鳥獣駆除によって「猿害」問題を解決できたのは、サルを全頭捕獲し、絶滅させた地域だけとの報告もある。

この一連の「猿害」問題を取材して不思議に思うことがあった。それは「猿害」対策のテーブルに、野生動物の専門官や生物の研究者などが加わっていないことだ。彼らは野生動物による被害とその対策のための専門家であり、サルたちとその生息環境を知り尽くしている研究者でもある。

「猿害」は野生動物の保護管理と対極にあるのではなく、その同一線上に並んだ同じ問題であるはずだと思っただけだ。

### ●人間社会と密接に関するサルの森

植物や昆虫を食べるニホンザルにとって、多様な生物の森こそが彼らの理想の住まいとなる。ブナ林に代表される広葉樹の森は、複雑な生態系が多様な生物を抱え、季節ごとの恵みをサルたちに与えてくれた。しかし昭和30年代頃に始まった拡大造林政策が日本の森を変えた。東京も例外ではなかった。

金にならない広葉樹はどんどん切られ、スギやヒノキなどの植林地が増えるに従い、森の中の生物の多様性は失われていった。

さらに高度経済成長が山村の過疎化に拍車をかけた。若者たちは都会へ流れ、林業の衰退とともに山には人が入らなくなった。山や畑を守る人間がいなくなればサルたちは畑に出やすくなる。こうして野生動物たちの生活は人間社会の変化とともに変わっていくことを余儀なくされた。

そんな時代の変遷の中で、檜原村のサルたちを見守ってきた野生動物保護管理事務所の白井さんの目に「猿害」問題はどのように映っているのだろうか。

「猿害」は日本社会の歪みそのものが野生のサルたちの生活に反映されたもので、被害の原因を作り出しているのは人間社会です。野生のサルにとって森は生きていく場所そのものですから、その森の変貌や人間活動のさまざまな変化は、彼らにとっては大きな脅威だったはずですよ」

白井さんは被害の原因をサルに求めるかに聞こえる「猿害」という用語が、果たして適切なのかと躊躇しつつ、しかし被害を被る農家に対してはあくまでも同情的だ。そしてその対策をこう語る。

「これまで各地でネットや電気柵、爆音機、花火など、いろいろな防除が試みられてきましたが、それぞれに長所や弱点があります。そうした中で一番原始的ですが基本といえるのは、パチンコや花火、投石などによって

サルを畑から追い出す方法です。畑が危険な場所であることをサルに学習させ、人間の脅



◀檜原村矢沢林道での二ホンザル観察会。実際に森の中を歩き、サルの食べ物や食痕、糞などを観察。群れに出会うこともある。

威をサルに認識させることが大切です」

実際に青森県脇野沢村では、日当6、000円を払ってサルの監視を専門に行う職員を4名雇い、効果をあげている。白井さんはこうした被害防除体制の必要性を第一に挙げている。

これはサルの個体数や群れの数の把握、食性、土地利用や被害状況などを調査し、被害防除に役立てていこうというもので、究極的には野生動物の保護管理をめざすものだ。こうした被害防除の体制を整えるためには、地元住民、行政、野生動物の専門家、学識経験者、都市住民のボランティアなどからなる協議会を設置し、鳥獣行政、農林、環境、過疎教育など広い分野からの考察を行なっていくことが、今こそ必要だという。

さらには欧米のように、行政の中に野生動物保護管理の施設をつくり、専門家を配置し、地域に人材を育てていくことも大事だという。

こうしたことと同時に人間とサルとの共存のための指針として、サルの生息地である落葉広葉樹林の保存や、下刈りの時期や間隔、伐採方法などを工夫した施業を行い、野生動物にとっても、又、林業の活性化にとってもプラスになるような森づくりをすることを、白井さんは提言している。これは欧米や日本の東京大学北海道演習林などですでに始められている。

## ●東京にサルが生息する事の意味

「猿害」という一点から見れば、人々の敵であるかのように位置づけられているサルたち。しかし、この東京に野生のニホンザルが生息しているという事実は、我々人間も彼らと同じ自然の一員なのだと考えた時、とても大きな意味を持つ。私たちは50年後、100年後の子孫のために、どれほどの野生動物を残していけるだろうか。

今世界の野生動物研究者の間では、現在の段階で何頭の個体が生き残っていたら、100年以上の将来にまで、健全な状態でそれらの野生動物を生き残らせることができるだろうという研究が盛んに進められている。

日本に生息する人間以外の唯一の霊長類であるニホンザルは、日本固有の種であり、その分布は青森県下北半島から鹿児島県屋久島までと広い。しかしその分布は一樣な密度ではなく、関東周辺では日光、群馬、秩父、奥多摩、南秋川、丹沢山塊、伊豆、山梨などに分断している。

野生動物の種が存続していくためには分布の連続性が非常に重要で、東京都である奥多摩、南秋川の分布は、連続分布の回復・維持のためには欠くことのできないものだという。野生動物の保護とは単なる動物保護の思想だけでは成り立つものでなく、地域個体群の適切な維持や管理ができなければ、人間との共存などあり得ないという。

ニホンザルの研究者であり「東京のサル」(どうぶつ社刊)という著書もある井口基さんは、ここ数年、自らの研究フィールドでも

ある檜原村矢沢林道で野生ザルの観察会を行なっている。観察会の目的は、実際にサルたちの棲む森の中で、サルたちの採食物やフン、群れの行動などを観察しながら、人間との共存の意味を、一人でも多くの人に考えてもらおうというものだ。

都会に暮らす人々に、こんな近くに野生ザルの棲む森があり、その森が人間にとっても価値あるものであることを知ってほしいと考えている。また、この観察会から野生動物に理解を深め、ともに調査・研究を行なっていく人材を養成していくことも、課題のひとつだという。

井口さんは言っていた。東京都の面積の約4割は森林であり、そこにはサル、クマ、カモシカ、シカ、イノシシなど本州に生息するほとんどの哺乳類が生息しているのだと。しかし、地球上の野生動物がかってないスπίードで絶滅の危機に向かおうとしている今、東京の野生動物たちも決してその例外ではないだろう。

「東京は野生の王国なんてすよ」と言っていた井口さんの言葉は今、沢山の意味を孕んでいてずしりと思ひ。追いつめられた野生のいのちを健全な状態に戻し、どれほど豊かに次の世代に残していけるのか。今を生きる私たちの責任は大きい。

(取材/金山淑子)

引用文献 東京都「日本ザル生息実態調査報告書」  
白井啓「東京の野生ニホンザル」

# 野性動物や自然とふれあう施設・施策

## 天売島の海鳥を守ろう 羽幌町で「国際海鳥フォーラム」開催



天売島など、海鳥の生息・繁殖地として知られる北海道羽幌町で、全国で初めて海鳥をテーマにした「国際海鳥フォーラム」が平成8年6月29、30日に開催された。コーディネーターは天売島在住の寺沢孝毅さん。パネラーは、北海道大学水産学部小城春雄教授、米国の野生動物学者ローラ・L・レシュナー氏ら国内外の専門家7人。約200人が参加、海外での海鳥の保護活動や天売島の海鳥の現状などが報告されたあと、チャーター船で天売島に渡り、夕刻大群で島に帰るウトウを観察したり、翌日はバードウォッチングやパネル討論会が行われた。

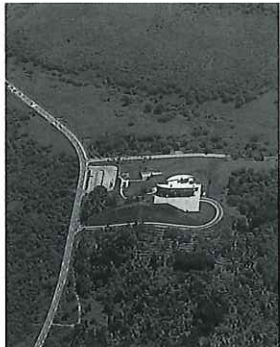
海鳥繁殖地として、国の天然記念物にも指定されている天売島は、同町の沖合約30キロに浮かぶ周囲12キロの小島。繁殖期の鳴き声からオロロン島と呼ばれるウミガカラ

スなど8種類1000羽近い海鳥が生息、これらは国内では天売島のみで繁殖している貴重な海鳥が多い。今後コロニー(集団営巣地)の環境保全や「人と自然が共生するまち・羽幌町」をめざして、海鳥の保護・啓発の普及、北海道海鳥センター(仮称)の建設等が予定されている。

●羽幌町役場企画課 ☎01646 (2) 1211

## 霧多布湿原を開発から守れ 浜中町が民有地等 300ヘクタールを購入

霧多布湿原は3168ヘクタールの広さを持つ国内3番目に大きな湿原。中央部803ヘクタールは「霧多布湿原泥炭形成植物群落」として国の天然記念物に指定され、6・7月にはワタスゲ、エゾカンゾウ等の花が一面に咲く。タンチョウをはじめ水鳥や野鳥も多く、湿原周辺の森林にはヒグマ、エゾシカ、キタキツネ、エゾリスなど



が生息している。浜中町では平成5年5月に、霧多布湿原の魅力や町内外にアピールすると共に野外自然活動の拠点として町営「霧多布湿原センター」をオープン、年間5万人が訪れて好評を博している。同年6月にはラムサール条約登録湿原として正式に認定を受け、国設鳥獣保護区にも指定された。

町では霧多布湿原を開発から守るため民有地や蓄農業協同組合等から土地の購入を続けてきた。購入した場所は、道路沿いで住宅も簡単に建ちやすい場所。「これらを開発から守り、手つかずのまま保全したい」というのが町や市民の願いで、現在までに292ヘクタール(8460万円)を購入、寄附約13ヘクタールを含めると304・8ヘクタールを町有地として獲得した。

また、平成6年に学術研究支援制度の審査委員会が開催されたのを機に、湿原等の自然研究や保護活動をする人々を対象に助成制度を創設。助成金は年間80万円で件数に応じて分配、昨年は10件、今年は14件の応募があり、その中には外国人留学生もいる。

●浜中町役場企画財政課 ☎0153 (62) 2111

## 厚岸湖・別寒辺牛湿原に 「原岸水鳥観察館」



平成5年に開催されたラムサール条約の会議で、隣町の霧多布湿原らと共に登録湿原に認定された厚岸町の厚岸湖・別寒辺牛湿原に平成7年4月「原岸水鳥観察館」がオープンした。

木造2階建の観察館は、一階が展示室、レクチャールーム(70インチのビデオで野鳥や植物等のVTRが鑑賞できる)、研究室があり、二階は展望室。他にタンチョウ、アオサギ、オオハクチョウ等を間近かに見られる観察小屋がある。

厚岸湖・別寒辺牛湿原は低層湿原の上流部に100ヘクタールに及ぶ高層湿原(ミズゴケ湿原)があり、数多くの野生動物も生息している。これらを間近かに見ながら、四季折々の自然を映像や写真で紹介するもの。

# INFORMATION

## 日本のラムサール登録湿原

正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿原に関する条約」で、条約が採択されたイランのラムサール市の名を取って、一般的に「ラムサール条約」と呼ばれている。湿原の保全と賢明な利用、湿原の変化の監視、研究の奨励・湿原の保全に携わる人の訓練等を求めている。

日本のラムサール登録湿地は次の通り。

登録湿地名	面積(ha)	登録年月	所在地
釧路湿原	7,726	1980.6	北海道 釧路市外3町村
クッチャロ湖	1,607	1989.7	// 浜頓別町
ウトナイ湖	510	1991.12	// 苫小牧市
厚岸湖・別寒辺牛湿原	4,896	1993.6	// 厚岸町
霧多布湿原	2,504	1993.6	// 浜中町
伊豆沼・内沼	559	1985.9	宮城県 迫町外2町
谷津干潟	40	1993.6	千葉県 習志野市
片野鶴池	10	1993.6	石川県 加賀市
琵琶湖	65,602	1993.6	滋賀県 大津市外21市町

また、カヌーによる湿原探訪も実施しており、約3kmの別寒辺牛川を60分かけて川下りする(簡単な講習を受けた人にライセンスを交付)。☎厚岸水鳥観察館 ☎0153(52)5988

**アザラシの保護・野生復帰も 広尾海洋水族科学館 (北海道広尾町)**

ゼニガタアザラシが生息するエリアも岬の近くにあり、魚類を飼育展示する本館、アザラシ・トド・アシカを展示する海獣館、ラッコ

の館の3館で構成されている。170種50000点の魚類があり、目玉は体長1mを超えるオヒョウ。子供にはラッコやアザラシ、巨大なトドが人気で、TVで話題になった絵を描くアシカ「ミミちゃん」もいる。

春になると毎年ゴマフアザラシやゼニガタアザラシの赤ちゃんが10頭近く保護され、園ではこれらを収容して飼育し、リハビリ後海に返している。☎015558(2)3707

### サケのすべてをナマで

**「サーモンパーク」(標津町)**

サケの漁獲高日本一を誇る標津町の名前を一躍有名にしたのが町立サーモンパーク。

サケ・マスが超大型水槽で自然のままの姿で回遊する姿は見事で、サケにもいろいろの種類がいることに驚かされる。サケの養殖、加工等もひと目でわかるようになっており、広大なパーク内は河川と海の臨場感にあふれている ☎01538(2)1141

### ハクチョウの飛来で人気 新潟県立自然科学館

新潟市の日本海沿い、鳥屋野潟近くに開設している新潟県立自然科学館は、県内や日本海洋の動植物の展示を行っているが、人気は鳥屋野潟に飛来するハクチョウや天然記念物ヒシクイ等の観察会。

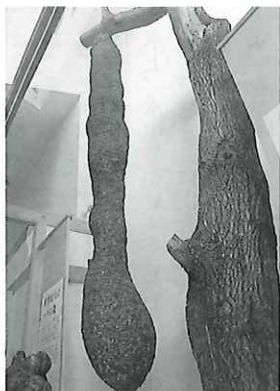
屋上の大型双眼鏡で潟が一望でき、ハクチョウの姿を間近に見ることが出来る。12月から2月までの日曜日。野鳥についての講演会等も開催される。☎0252(83)3331

### 世界最大のハチの巣

**「ハチ博物館」(長野県中川村)**

信州伊那地方は昔から「蜂の子」「蜂蜜」などの郷土特産品で有名だが、赤石山脈山麓の中川村大草に「ハチ博物館」がオープン、全長410cmの世界最大のハチの巣が人気を呼んでいる。

ハチ研究家富永朝和氏の長年の研究に、地元の人々が協力、キイロスズメバチの女王蜂29匹を一緒にして一つの巣を作ること成功したものの(普通は一匹の女王蜂を中心に30〜40cmの卵型の巣を作る)。富永グループでは、続いて長野冬期オリンピックの開催へ向けて、スキーヤーの型をした巣作りを手がけている。



▼410cmあるハチの巣  
▼オオムラサキセンター



かり、蜂たちのすぐれた能力に改めて驚かされる。同博物館は交流センター「望岳荘」の中にあり、宿泊・入浴、食事、陶芸体験教室なども楽しめる。☎0265(88)2033望岳荘

### 八ヶ岳南麓の雑木林に

**「オオムラサキセンター」(山梨県長坂町)**

オオムラサキは昭和32年日本昆虫学会において、世界に誇る日本の代表的な蝶として国蝶に決った。羽を広げると10cm以上になる大型のタテハ蝶で、雄は羽の表面が美しい紫色。全国各地に分布しているが、生息地となる雑木林の減少で、その姿を見る機会は年々少なくなっている。山梨県長坂町では平成8年4

# 野性動物や自然とふれあう施設・施策

月にオオムラサキセンターをオープン。敷地内にはエノキ、クヌギ、コナラなどの雑木林と湧水が流れる小川があり、この美しい自然環境の保全を兼ねて建設された。

オオムラサキの羽をイメージした屋根の建物で、八ヶ岳南麓の自然と昆虫、各地の蝶などが標本、ジオラマ等で観察できる。  
☎0551(32) 6648

## 昆虫たちがいつばい 「檀原市昆虫館」(奈良県)

平成元年オープン。標本コーナーと生体展示コーナーがあり、飼育室には現在約50種10000余点の昆虫が、また温室では一年中蝶々のとぶ姿を見ることができ、「昆虫の求愛・ラブ」など特別展やセミナーも年間を通じて開催されている。  
☎0744(2) 7246

## 世界の秘境に住むカモシカも (財)日本カモシカセンター

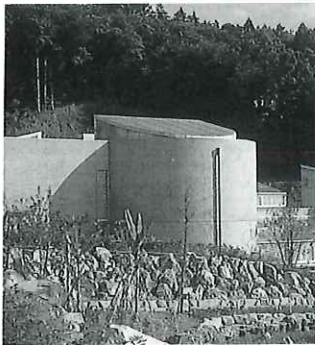
三重県と滋賀県にまたがる鈴鹿山脈には、特別天然記念物のニホンカモシカが沢山生息しており、「カモシカ銀座」といわれる山脈のほぼ中心、御在所岳(1210m)の山頂にあるのが(財)日本カモシカセンター。御在所山岳動物園と御在所自然科学博物館から成

り、ニホンカモシカの保護・繁殖生態研究からスタート。77年にはロッキー山脈に生息するシロイワヤギが入園し、以来ゴール、シヤモア、サイガなど世界の秘境からやってきたカモシカの仲間が8種約50頭いる。繁殖も行われ、毎年赤ちゃんも誕生している。

同園までは御在所ロープウェイに乗るので空中散歩を楽しみながら、眼下の岩場に立つニホンカモシカを観察できる。  
☎0593(92) 2028

## ジャングルの生態等を再現 「のいち動物公園」 (高知県野市町)

動物達がのびのびと生活できる自然派動物園・高知県立のいち動物公園内に昨年7月にジャ



ングルミュージアムがオープンした。

熱帯のジャングルの生態等を

まるごと再現してその臨場感を体験できるもので、中南米(アマゾン)と東南アジアの二つのゾーンに分かれた館内では、樹上、地上、水中で生息する動物たちが熱帯植物と共に混合飼育されている。その数は58種700点にも及ぶ。動物の中にはマレーグマのように絶滅の危機種もあり、繁殖にも力を入れている。高さ15m、三層吹き抜け構造の展示場で熱帯特有のスクロールまで再現された21世紀型の動物園。  
☎08875(6) 3500

## タンチョウの人工孵化も 岡山県立自然保護センター (佐伯町)

100ヘクタールという広い自然公園には池あり湿原あり野山ありと変化に富んだ自然が再現され、野鳥や昆虫も多く、日曜日ごとに観察会が開かれている。

同公園内には広さ1ヘクタールの飼育センターがあり、タンチョウの飼育舎も5つある。ここでは4年前に3組のカップルが産卵したものを人工孵化し、2羽のヒナが誕生した。北海道釧路の「タンチョウツル自然公園」を見習って作られたこの飼育センターでは、自然繁殖や人工孵化に力を入れ、将来はタンチョウを放し飼いにし大空を自由に飛ばせるのが夢。  
☎

0869(88) 1190

## ツシマヤマネコの保護増殖に 対馬野生生物保護センター

ツシマヤマネコをはじめとする対馬に生息する貴重な野生生物の調査研究、保護増殖及び普及啓発の拠点として、対馬の北西部に位置する上県町棹崎地区で対馬野生生物保護センターの建設が進められている。

この対馬野生生物保護センターは環境庁による事業で、平成7年度に建設に着手し平成9年度のオープンを予定しており、対馬特有の石屋根のイメージも取り入れた建物に展示室、視聴覚室、研究室などを用意した施設となる。

このセンター建設に併せて、長崎県ではツシマヤマネコの野生復帰のためのリハビリ施設や生息に適した環境を整備するための「対馬自然の森整備事業」を実施しており、センターと一体的に保護対策を展開する計画。



緊急報告  
絶滅危機の  
野生動物を  
救え!

## 天然ブナ林の住人 天然記念物クマゲラは 生き残れるか?!



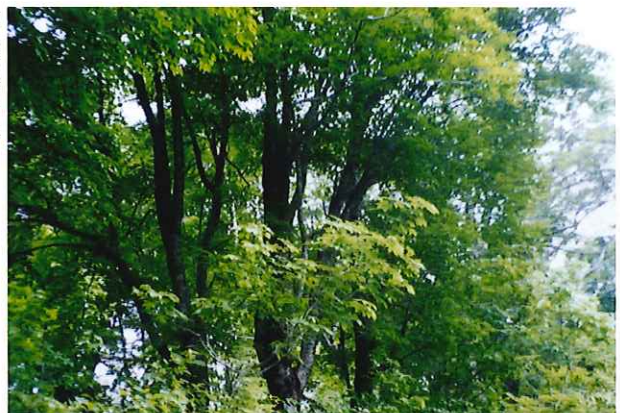
▲森吉山のクマゲラの子育て

クマゲラはとても魅力ある野鳥である。真っ黒の礼服、真っ赤なベレー帽を頭上に載せている大型のキツツキの仲間だ。国指定天然記念物として保護されている反面、その生息地である天然ブナ林が伐採の洗礼を受け続けている。クマゲラは本州では天然ブナ林、しかも古木を混じえた成熟したブナ林でなければ生息できない。

昭和53年、本州では秋田県森吉山ノロ口地区で初めてクマゲラの繁殖が確かめられた。近年、森吉山のほか、白神山地の天然ブナ林で、毎年数つがいのクマゲラの繁殖が確かめられている。

白神山地をはじめ十和田湖、八幡平等で、一体どれくらいのブナ林が残存しているだろうか。環境庁の調査より、東北地方北部(青森県、秋田県、岩手県)では、総面積約370、000㏎の天然ブナ林が残っている。しかし、そのうちクマゲラが生息している地域あるいは生息の可能性のある地域(クマゲラの生活痕のある地域)を合わせても約87、000㏎が残っているにすぎない。その中でクマゲラは、一体どれくらい生息しているのだろうか。東北地方のクマゲラの生息数を推定するため、クマゲラの一つがいの行動圏を調査したところ、約1、000㏎以上であることが明らかになった。

前述のクマゲラの生息域は約87、000㏎であるから、そこにぎっしり生息しているものと仮定すると、約174羽が生息していることになるが、そんなことはあり得ない。これまでの調査から、東北地方北部では50〜100羽のクマゲ



▶白神のブナ林

ラが生息しているものと考えている。古木を混じえた成熟したブナ林がクマゲラの生息地域であるが、上述の生息個体数で種の存続が可能であろうか。きわめて危険な状態であると言わざるをえない。

本州のクマゲラの保護対策については、これ以上ブナ林の伐採は見合わせ、これまで伐採した地域はブナ林の更新を図ること以外に方法がなさそうだ。もし天然ブナ林を伐採する場合は、小規模伐採にし、クマゲラをはじめ多くの野生鳥獣の生息に適した伐採方法を講ずべきであり、将来を見越した森造りをする必要がある。

秋田大学教授(教育学部生物学研究室)

小笠原高



写真提供／長崎県自然保護課

## 楽園を守れ！ ツシマヤマネコの保護対策

長崎県の対馬は日本海の西の端に浮かぶ島で、北は朝鮮海峡を隔てて大陸と、南は玄海灘を隔てて九州本土に面しています。北端は大阪、南端は和歌山付近の緯度に相当し、南北82km、東西18km、南北に細長い島で、沈降と隆起によってできたリアス式海岸に囲まれています。全島の約90%が山林に被われ、急峻な深い山々が連なり標高2000m～3000mの山々が海岸まで迫っています。

この島は、日本列島と大陸との交流の歴史の上で重要なかけ橋であるように、生物相にとっても重要な役割を果たしてきました。我が国では対馬にのみ生息するツシマヤマネコはアジア大陸に広く分布するベンガルヤマネコの仲間とされており、対馬が大陸と陸続きだった約2万年前から1万5千年前の氷河期に大陸からやってきたと言われ、日本列島と大陸の関係を示す生き証人として学術的にも重要な野生動物です。

かつては、島内に広く生息していましたが、昭和60～62年度に実施された環境庁の調査では生息域が狭まり、個体数も100頭前後に減少していることが判明しました。生息環境の変化やそれに伴うノネズミ等のエサ動物の減少がその理由として考えられています。

このようなことから、ツシマヤマネコは我が国の野生動物の中で最も絶滅のおそれの高い種の一つに上げられており、平成5年4月に施行された「種の保存法」による国内希少野生動物植物種にも指定されました。平成5年5月には地元の保護意識の高揚を図るため県と上県町などの

共催で「対馬ヤマネコシンポジウム」を開催しましたが、こうした催しなどを通じて地元でもツシマヤマネコへの関心が高まりつつあります。また、地元有志を中心に「ツシマヤマネコを守る会」が発足し、会員がボランティアで島内の主な生息場所や冬場を中心に給餌と観察活動を始めました。

現在、環境庁と長崎県では専門家や地元協力を得ながら、ヤマネコの生態調査、生息環境の保護回復・個体数回復を目的とした保護増殖事業（飼育繁殖・野生復帰）などの取り組みを進めています。今後、ヤマネコの保護と地域の人口とのよりよい共生の実現に向けて行政、民間レベル双方の広範にわたる連携と協力が必要と考えられています。

長崎県自然保護課長 渡辺綱男

▼ツシマヤマネコの生息地（上県町田ノ浜地区）





# イリオモテヤマネコ保護増殖事業

緊急報告  
絶滅危機の  
野生動物を  
救え!



▲自動撮影装置が捉えたイリオモテヤマネコ

イリオモテヤマネコは1967年に新種として発表された西表島にのみ生息するネコ科動物で、現在99〜100頭が生息していると推定される。環境庁のレッドデータブックでは絶滅危惧種にカテゴリーされており、平成6年1月に国内希少野生動物種として指定された。

本種は西表島の生態系の頂点に立ち、トカゲやカエルなどの両生は虫類、シロハラクイナなどの鳥類、さらには昆虫まで様々な動物を捕食する。オスで2〜3km、メスで1kmほどの行動圏をもち普段単独で生活している。標高2000m以下の低地部を分布の中心に低地林や沢沿いを好んで生活する。ここ十数年間で急激な個体数の減少はみられないものの、生息上重要な低地部の生息域の縮小や分断の進行、度重なる交通事故の発生、伝染性の疾病の浸入・流行のおそれなど個体群の健全かつ安定した存続に支障を及ぼす恐れのある要因が存在している。

環境庁沖縄地区国立公園・野生生物事務所は平成7年7月17日に策定されたイリオモテヤマネコ保護増殖事業計画（環境庁・農林水産省）に基づき生息状況の把握・モニタリング調査を実施し、自然状態で安定的に存続できる状態になるように保護を図っている。

生息状況の把握とモニタリングのため、現在島内合計10ヶ所に自動撮影装置を設置し、撮影個体の識別を行い生息個体数、繁殖状況をモニターしている。またその装置を訪れる個体を捕獲し、病理学的検査を行い個体の健全性を把握するとともに、電波発信機を装着しラジオ・トラッキング調査により行動圏、場所利用などの情報を収集している。これら調査が困難な内陸部などの山岳地域においては数日間山に入り糞や足跡などの痕跡の分布調査を実施している。さらにヤマネコの目撃地点などの情報を書き込み、生息情報マップを配布・回収、積極的に

情報収集を行なっている。これらの生息情報をもとに、イリオモテヤマネコが高密度で生息する重要な地域や頻繁に利用する場所の割り出し、開発計画における生息地確保のための調整、交通事故防止のための道路標識の設置、説明会・広報による普及啓発活動などの保護対策を実施している。

▼イリオモテヤマネコの由珍（ゆづん）調査地



最近、遺伝的多様性が耐病性に関係し種の存続に大きく影響すると考えられている。生息数わずか100頭のイリオモテヤマネコの遺伝的多様性はかなり低いという報告もあり、今後これら因果関係の解明も緊急課題である。

環境庁沖縄地区国立公園  
野生生物事務所西表分室 坂口法明



空や山を悠々と舞う姿は  
見られなくなってしまうのか

イヌワシとの共存を目指して

緊急報告  
絶滅危機の  
野生動物を  
救え!

### 生息地を追われた 悲しい話ばかり

“風の精”とも形容されるように風をとらえることにかけてイヌワシの右に出る鳥はいないでしょう。空中停飛から時速300kmもの高速飛行を自在にこなし、その黒く大きな影が山々を駆けめぐるとまは擬人化され天狗伝説を生んできました。「狗鷲」と書くようにイヌワシは、古くから全国各地の民話や「天狗岳」、「天狗山」などの地名として人々の生活の中に取り込まれ、多くは信仰の対象として、山の守り神として崇められて親しまれてきました。

第2次大戦後の近代化の波にのみ込まれるようになり、人と鷲との絆は次第に疎遠となっていったのは時代の成りゆきだったように思えます。そしてしばらくの間イヌワシが話題となることはありませんでした。

つぎにイヌワシが話題として取り上げられるようになったのは、バブルが崩壊しはじめたころからです。

そこでとりあげられる話題は悲しい、さびしい話題ばかりでした。それは各地のイヌワシが、開発によって生息地を追

い立てられることになったというような話題が多くなってきたからです。

日本イヌワシ研究会では1981年から毎年、全国のイヌワシの生息状況を調査し、データベース化しています。このデータベースによって、すでに日本に生息しているイヌワシは種を維持してゆけるぎりぎりのところまで減ってしまっていること。またそれに追い打ちをかけるように、最近の繁殖成功率はわずか20・1%（1991-1993）にも低下していることがあきらかになってきました。

なぜ繁殖成功率が低下してしまっているのでしょうか。食物連鎖の頂点に位置している生物の宿命として、農薬や重金属汚染の生物濃縮を受けとめる役を引き受けているので、正常な繁殖ができなくなっている。また、ダム工事やスキー場開発、そして国有林の切り売りなどによって、イヌワシの生息地を奪い去っているということもデータベースはあきらかにしています。

イヌワシ研究会では保護増殖に関する事業、たとえば使えなくなった果の改修や死亡原因調査、卵および雛の活用、幼鳥分散調査などを実施していますが、NGOで出来ることには限りがあります。

## ■イヌワシ

イヌワシは北半球の草地や低かん木が広がる山岳地帯に分布し、日本はイヌワシが生息できる南限である。一番いが生存するのに必要な行動圏は平均60km<sup>2</sup>で、環境の変化による影響を最も受けやすい。日本イヌワシ研究会では15年前より毎年全国規模で調査を行っているが、数年に一度しか繁殖しなかったり、全く繁殖しない場合が多く、さらに現在生存しているイヌワシの番いの寿命が切れる時に生息場所はさらに激減しそうだ。

## ■クマタカ

イヌワシが北半球に広く分布しているのに対し、クマタカの分布域は狭く、スリランカから東南アジアにしか生息していない。南方系の森林が生息地で、日本では北海道から九州までに分布しているが、はっきりした数は不明。各地の調査から生息密度は約20km<sup>2</sup>に一番いと思われるが、クマタカは卵を一個しか生まず最近では2、3年に一回とか全く繁殖しないケースも増えている。営巣地は人家に近いところに多く、すぎやヒノキの人工林では繁殖に必要なエサが確保できないこと、また林道工事や写真撮影者の人為的な影響も繁殖阻害の一因になっている。



写真提供/日本イヌワシ研究会(片山磯雄氏・撮影)

かといつてこのままのペースですすめば日本の空と山から、悠然と舞うイヌワシの姿をみるのが出来なくなる日が恐び寄ってきているのは間違いありません。

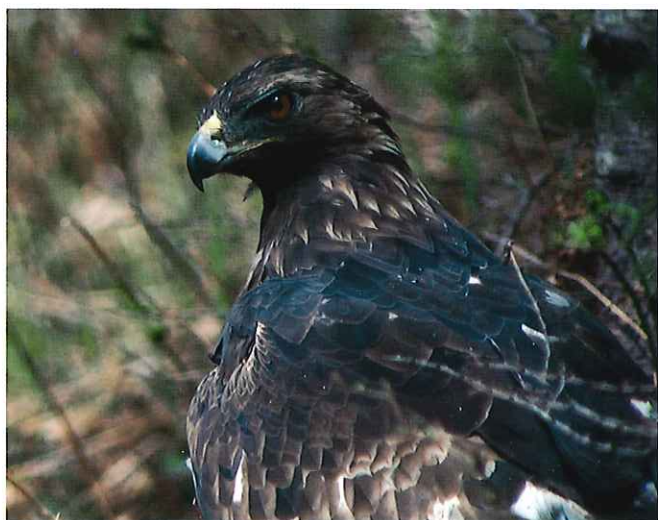
### 「これからも日本人は『種を破壊』し続けるのか」

目先の利益を追及することばかりに目を奪われて、長い間ウエルバランスで維持され続けてきたふるさとを自然を壊し続けてきたのは私たちの世代でした。その結果がイヌワシの種そのものを、絶滅寸前にまで追いやる結果になり、イヌワシの棲めなくなった地域の、崩れかけたバランスにしがみついて、私たちは暮しているような気がします。

環境庁にもこのような危機的状況が理解され1955年度よりイヌワシ保護増殖事業がスタートしています。まだまだはじまったばかりですが、イヌワシ研究会でもこの事業には期待しており、全面的に協力しています。

今世紀にはいつて日本人は二ホンオオカミを始めコウノトリ、ニホンカワウソ、そしてトキを破壊に追いやってきました。地域の活性化を旗印にしての改革を根本から改めない限り、これからも日本人は「種を破壊」し続けるのではないのでしょうか。

最近よく使われるようになった言葉に「共生」・「持続可能な開発」というのがあります。開発によって人間だけが利益を受けて、他の生物を迫害してもかまわないとする人間優先の考え方をこの辺で改めて、視野を広げ、人間以外の生物の



存在を認め、動物にインパクトを与えることのないよう配慮しながら開発していくやり方がせひとも求められています。実際にはまだまだかけ声だけです、人間もイヌワシも大切な私たちとしては、自然環境を維持し、彼らとの共生を早急のぞむものです。

地球に生まれた数えきれないほどの種の中から、飛び抜けて高い知能を授かった人間である私たち、それだからこそ、その頭脳は他のすべての種についてもそれなりの責任を負わされているのではないのでしょうか。

日本イヌワシ研究会副会長 山田律雄

# 河畔林の回復や自然繁殖(動物園)で— シマフクロウ

緊急報告  
絶滅危機の  
野生動物を  
救え!



▲飼育下で世界初の繁殖に成功したシマフクロウのヒナ (釧路動物園提供)

オホーツク海を隔ててサハリン、クナシリ島等に生息し、日本では北海道のみに分布する日本最大のフクロウ。北海道開拓以前は、アイヌの人々に「村の守り神」として崇められ、全域に分布していたが、たび重なる開拓で生息地を失って

きた。現在、根室、知床、十勝地方を中心に80〜100羽が生息するのみになると推測される。

シマフクロウが安定して増えていくためにはヒナが無事育て果立ち、独立して親元を離れた子供が新たな生息地を見つけて定着し、恋人と出会って繁殖に成功しなければ、個体数は増加しない。

しかし、シマフクロウが住める広葉樹林の森とエサとなるサケが遡上してくる河川は極めて少なくなり、住宅難、食料

難にあえいでいる。

新たな住いとなる場所がないので、親子が一方所に同居し、その結果、近親交配が進んでいるのも問題になっている。

現状を憂う人々により、河川への魚の放流や巣箱の設置などが行われ、若いシマフクロウを別の森へ放つ方法もはじめられている。

オジロワシの自然繁殖、人工孵化等、貴重な野生動物の保護繁殖を手がけている釧路動物園では、平成5年に鹿児島市平山動物園からシマフクロウのオスを、上野動物園からメスを借り繁殖を試みていたが、平成7年に世界で初の自然繁殖に成



▲ヒナにエサを運ぶ親 (釧路動物園)

功した。

園内に設けられた林の中の雰囲気を生かして作られたゲージの中で、母親はエサを運び二羽のヒナが元気に育っている。現在ペアが3組。この中でさらに自然繁殖に成功できればと志村飼育専門員らの努力が続く。

「大きな樹木のある生息地となる森が少ないうえに、その森を結ぶ移動ルートが失われた。保護には河畔林の回復が急務です。そのためには多大な時間を要しますので、我々動物園は応急処置として一羽でも多く繁殖させていくことだと思っています」と上田園長は語る。

釧路動物園ではエゾフクロウ、シマフクロウの人工孵化や自然繁殖にも成功、24時間体制による職員の手付けが行われている。

フクロウは森の哲学者。人間が喰い荒していく地球をどのように観察、考察しているのだろうか。

(A)

▼キイトンボの連結産卵(トンボ自然公園にて)  
▲絶滅危機にあるベッコウトンボ



## 生息地の近くに新たな繁殖地を 絶滅危機にあるトンボたち

亜種を含め210余種いることで知られる日本のトンボ。幸い、まだ絶滅宣言の種類はいないが、一歩間違えばそうなりかねないものは少なくない。

たとえば小笠原諸島だけに生息するオガサワラアオイトトンボとオガサワラトンボ。オガサワラトンボに至っては、とうの昔(1968年)に国の特別天然記念物に指定されているのだから情けない。種としてはないが千葉県の房総半島だけに分布するヒガシカワトンボのシロハネ型もかなり厳しい状態である。このトンボは愛好家の採集熱も軽視できない。

一方、本来広い分布域を持ち繁殖力も決して弱くはないのに、危機的状况に頻している種類がある。ベッコウトンボがそれだ。ベッコウトンボは全長50mm内外。♂共、羽に独特の斑紋を持つ。成熟した♂の体は青味がかつた濃褐色で、♀は濃褐色。日当たりと風通しがよく、背の高い湿性植物が繁茂する低湿地に生息し、宮城県から鹿児島県南端まで記録がある。ところが現在、このトンボが安定して生息している水辺は静岡県桶ヶ谷沼、鹿児島県の蘭牟田池など全国で数箇所を過ぎない。

このトンボが減少した一番の理由は、やはり生息水域の汚染や埋立だが、トンボ自身の性格的要因も見逃せない。上述のとおり、ベッコウトンボはヨシやガマなど背の高い植物が密生する環境を好む。しかもそれは枯草が中心でなければならぬ。活動期の5月においてである。

またこれはトンボ王国での移動実験か

▼モノサシトンボとヒメコウホネの花

ら判ったことだが、このトンボの羽化は卵を置いた場所とほとんど同じ場所で見られる。ということは、ヤゴは羽化した場所からほとんど移動しないということである。

したがって濁水などで生息地の水位が下がったとしても、自らがより深みへ移動することもなく、そのまま干涸びてしまう可能性が高い。

事実上述の一大生息地においても、早魃の翌年には実にあっけない程その数を減らしているのである。卵から人工飼育して成虫まで育てることは決して難しくはない。ただ近親交配による将来の遺伝子劣化を考えると、現生息地に一腹の個体群を大量に放つことにはいささかの抵抗を覚える。

トンボ増殖の最良の方法は現生息地の近くに繁殖を狙う種類の好みそなう環境を再生し、彼らの自然増殖を狙うことである。もちろんベッコウトンボも、オガサワラトンボに対してもこの方法がいい。それまでできるだけ早急に。

(社)トンボと自然を考える会代表

写真・文/杉村光俊



# 4年目を迎えて一羽が誕生 鳥島でアホウドリの新居作り



▶アホウドリの飛翔  
▲デコイ(左)の脇で翼を広げるアホウドリ。他は全てデコイ。



▶初寝崎ではじめて生まれたアホウドリのヒナ(96年2月)



溶岩と火山灰でおおわれた乾いた地面に、風の音と靴音だけが響いている。この荒涼とした土地が子育てをするアホウドリの賑やかな声で満ちていたとは、にわかには信じがたい。

伊豆諸島、八丈島の南300kmに位置する鳥島で、人間の手によって、絶滅の危機にたたされた海鳥の保護活動が行われている。

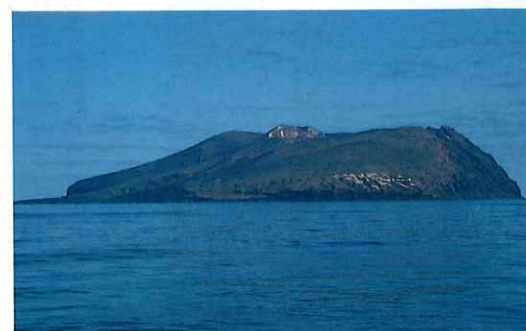
アホウドリは、羽布団の材料として、鳥島だけで少なくとも500万羽が乱獲され、現在では地球上に約6~700羽が生存するのみの、北半球最大の海鳥である。

現在鳥島の営巣地は、火山岩の急斜面にある。雨が降ると土砂が流出し、卵が流されたり、雛が土砂に埋もれるなどの事故も起きている。大雨による斜面の崩壊や火山の噴火が起これば、もはやアホウドリにとって取り返しのつかない事態に陥ってしまう。そのため、より安全な

緊急報告  
絶滅危機の  
野生動物を  
救え!



▲設置前のアホウドリのデコイと音声用のソーラパネルの準備をする研究員たち。▼鳥島(船上から)



写真提供/(財)山階鳥類研究所

場所に、アホウドリを誘致しようと始められたのが、このプロジェクトだ。誘致先には、過去2回の噴火にも大きな被害がなく、鳥島で一番状態のよい草原(初寝崎)が選ばれた。ここで実物大のアホウドリのデコイ(模型)を置き、アホウドリの音声を通し、本物のアホウドリをおびき寄せようというものである。

この活動は、環境庁とサンクトリー世界愛鳥基金の助成、海上保安庁などの協力を得て、(財)山階鳥類研究所が1992年から行っている。

4年目を迎えたこの6月、初寝崎をふささとするアホウドリの一羽が巣立っていた。この野性動物相手の気の長いプロジェクトは、新たな第一歩を踏み出したところである。

(財)山階鳥類研究所

鶴見みや古

# 我が国の絶滅のおそれのある野生動物種 (資料：環境庁)

凡例：国内希少種51種 国際希少種 CITES I・II種

保護増殖事業計画14種 生息地等保護区アリ 天然記念物# 特別天然記念物##

	絶滅種(Ex)	絶滅危惧種(E)	危急種(V)
哺乳類	ニホンオオカミ エゾオオカミ ニホンアシカ オキナワオオコウモリ オガサワラアブラコウモリ (5)	ニホンカワウソ# ツシマヤマネコ# II イリオモテヤマネコ## II (3)	トウキョウトガリネズミ チョウセンコジネズミ ワタセコジネズミ オガサワラオオコウモリ# II アマミノクロウサギ## アマミトゲネズミ オキナワトゲネズミ ケナガネズミ# ツシマテン ゼニガタアザラシ ケラマジカ (11)
鳥類	ハシブトゴイ カンムリツクシガモ マミジロクイナ リュウキュウカラスバト オガサワラカラスバト ミヤコショウビン キタタキ ダイトウミソサザイ オガサワラガビチョウ ダイトウハシナガウグイス ダイトウヤマガラ ムコジマメグロ オガサワラマシコ (13)	アホウドリ# I チシマウガラス コウノトリ# I トキ## I オジロウシ# II オガサワラノスリ# I ダイトウノスリ II クマタカ II イヌワシ II カンムリワシ## II ライチョウ## タンチョウ## I ヤンバルクイナ# アマミヤマシギ ウミガラス エトビリカ ヨナクニカラスバト アカガシラカラスバト# キンバト# シマフクロウ# II ノグチゲラ## オーストンオオアカゲラ# ミユビゲラ ヤイロチョウ II オオトラツグミ# ハハジマメグロ## オガサワラカワラヒワ (27)	カンムリウミスズメ クロウミツバメ シジュウカラガン I サカツラガン ツクシガモ ミサゴ II オオウシ# II オオタカ II チュウヒ II ハヤブサ I シマハヤブサ I チベツル# I マナツル# I オオクイナ ヘラサギ カラスバト# クマゲラ# コシヤクシギ シベリアオオハシシギ カラフトオオハシシギ I カンムリウミスズメ# アカビゲ# ホントウアカビゲ ウスアカビゲ アカッコ# オオセッカ ルリカケス# (27)
爬虫類		キクザトサワヘビ (1)	セマルハコガメ# リュウキュウヤマガメ# (2)
両生類		ホクリクサンショウウオ アベサンショウウオ (2)	ハクバサンショウウオ イシカワガエル オットンガエル ホルストガエル (4)
淡水魚類	クニマス ミナミトミヨ (2)	キリクチ サツキマス イワメ リュウキュウアユ アリアケシラウオ アリアケヒメシラウオ ヒナモロコ ウシモツゴ イタセシバラ (16)	ニッポンバラタナゴ スイゲンゼンタナゴ ミヤコタナゴ# アユモドキ# ネコギギ# アリアケギバチ ムサシトミヨ イトウ ゴギ ウケクチウグイ ハリヨ ムツゴロウ ヤマノカミ (6)
昆虫類	コソノメクラチビゴミムシ カドタメクラチビゴミムシ (2)	イシイムシ ヒヌマイトトンボ ベッコウトンボ エグリタマミズムシ シオアメンボ イシガキニイニイ オガサワラハンミョウ ケバネメクラチビゴミムシ ツツラセメクラチビゴミムシ ウスケメクラチビゴミムシ リュウノメクラチビゴミムシ キイロホンゴミムシ ヤシャゲンゴロウ シャープゲンゴロウモドキ リュウノイワツヤムネハネカクシ ヨコミソドロムシ ヤンバルテナガコガネ# キイロネクイハムシ イソメマトイ ゴイシツバメシジミ# オオウラギンヒョウモン ミツモンケンモン ノシメコヤガ (23)	ミヤジマトンボ クロイワセミ カワムラナベブタムシ タガメ イカリモンハンミョウ ヨドシロヘリハンミョウ マークオサムシ ホシユウオイモジマゲンゴロウ マダラシマゲンゴロウ ゴヘイニクバエ イトウハバチ ギフチョウ ルーミスジシジミ ヒョウモンモドキ タカネヒカゲ (15)

お知らせ

## 全国過疎問題

## シンポジウム (広島市)

■テーマ

「豊かさの実感—魅力と誇りの創造—」

■日程と主な内容

●11月7日(金)基調講演

北川 泉(鳥根大学学長)

●11月8日(土)

▼第1分科会(広島県民俗文化センター)

「可能性を拓く—情報化—」

▼第2分科会(西區区民文化センター)

「個性を磨く—自然・景観・文化の保全・活用—」

▼第3分科会(メルパルク広島)

「安心を築く—高齢者のトータルケア—」

De POLA [でぼら]

NO.11 ('96秋冬号)

発行日/平成8年9月15日

発行所/全国過疎地域活性化連盟

〒105 東京都港区虎ノ門1-1-24

オカモトヤビル 8階

☎03(3580)3070(代)

編集協力・印刷/株ぎょうせい

編集工房アド・エー

協力/(財)地域活性化センター



そこに「当たり」がある限り。

よく買ったっけなあ、当たりつきアイス。  
もう一本もらえることより  
最後に「あたり」を目にしたときの  
あのうれしさを味わいたくて。  
今、宝くじ買うのと同じ気持ちだね。

●本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成されたものです。